
ミミック・コミュニケーション

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミミック・コミュニケーション

【Nコード】

N8707Z

【作者名】

いぼい

【あらすじ】

密やかに連続失踪事件が起こる街、咲珠市。

その事件の背後には、人の皮を被った化け物の存在があった。

一方同じ咲珠市に住む立島大輔には、双子の姉にも言えない大きな秘密があり……。

自HPで掲載したものを、加筆修正したものです。

皮

私、平井正美が家路についたのは、二十一時を回ってからの事だった。

家から一時間の場所になかった物を、更に一時間移動して探せば帰宅に二時間かかる。

簡単な理屈。しかし必死だった行きの私がそれに気づいたのは、帰りの私になってからだった。つまりそんなものは存在しないって事で、ちよつと哲学的だと思う。

しかし今、後悔している私はいない。

目的の物は手に入った。そう考えて紙袋の中を覗く。これを渡せば、弟も機嫌を直すだろう。

もちろんだけど、周囲はすっかり暗くなっていた。

私の家に近道で帰るには、人通りの無い路地を通らなければならず、心細い事この上ない。

こんな事なら弟に迎えを頼めば良かった。件の路地に入りながら私は考える。

「アレ？」

そんな中、私がつと気づくと、道の真ん中に人が座り込んでいた。辺りは暗く、私に背を向けている為よく分からないけれど、多分女の子の人だ。

「あの、大丈夫ですか？」

怪しい。そう思う前に、私はその人に声をかけていた。目的を遂げて気を抜いていたのもある。

でもそれ以前に、肩を振るわせるその人が本当に辛そうだったのだ。

「痛い。痛いのお」

背を向けたまま、その人は搾り出すように言った。

「痛いって、どこがですか？ 救急車を呼びましょうか？」

紙袋を地面に置いて私が問いかけると、女の方は後ろを向いたまま手に持った物を私に差し出す。

差し出されたそれは最初、ゴム手袋のように見えた。肌色で、でろんとしていて、薄っぺらい。

しかしそれにいくつか穴が開いていること。そして中でも一番大きな穴の周りに赤いラインが引いてあるのを確認し、私は息を飲んだ。

これは、口紅だ。そしてこの穴は、口。その上にはべちゃんこにつぶれた鼻があり、両脇にはまつげのついた眼孔が開いている。

まるで騙し絵のように、一つ正解が分かった途端それぞれのパーツに説明がつく。

つまり、そう、これは、人間の顔の皮だ。

「あ、あ……」

声が出ない。頭の中では作り物だ作り物だ作り物だと、常識が高速でアラートを鳴らし続ける。

しかし目の前にある、まるで叫びを上げているような顔面の皮のリアルさが、その常識をいつも簡単に押しつぶそうとする。

その恐怖に押し出されるように、私の常識が、落ち着こう、冷静になろうとして当然の帰結をしようとした。

痛いだなんて言っているけれど、これが、この人の顔の皮なんかな訳はない。だってこれがこの人の顔の皮だとしたら、本人の顔はどうなってしまうているのか。

その問いに答えるように、蹲っていた女の方がゆっくりとこちらを向く。

きつと、ただの悪戯だ。そうだ、そうに違いない。そうであって最後には祈るような気持ちになって、私はその人の顔を見た。

見ようとした。

その瞬間、私の視界は赤黒い、蠢く肉塊に覆われていて。

バクン、ゴリ、グシャグシャ。

私、平井正美の人生は、あっけなく終わった。

立島大輔と双子の姉

ピピピピ。 ピピピピ。 ピピピピピピピピピピ！

携帯のアラームが鳴り響き、俺は意識を覚醒させた。

手探りで携帯を探し当て、アラームを止める。そうしてあと五分と定番の要求をする脳を強引にねじ伏せ、上半身を起こした。

俺が寝過ぎしても、それを再度起こしてくれる可愛い幼馴染などはいないのだ。

などと半覚醒の頭で考えている内に、喉がひどく乾いていることに気づく。

余程大口を開いて寝ていたらしい。俺は口の中にある僅かな水分をかき集め、飲み込んだ。

喉の奥には嫌なネバつきがあり、それは唾液では流しきれない。

俺は視線を移すと、ベッド脇の引き出しの上に置かれた鏡で自らの顔を確かめた。

ぺたぺたと顔を触りながら、頭の体操を兼ねた自己紹介を脳内で行う。

俺の名は立島大輔。もはやお馴染みのギャグにすらなっているセリフであるが、お約束として言うておこう。

ただの、高校生である。

『咲珠市周辺では現在、行方不明者が続出しており、警察は住民に注意を呼びかけると共に、行方不明者の捜索を行っています。お心当たりのある方はご覧の宛先まで……』

眠い頭でぼんやりとニュースの音を聞きながら、一階に降りる。するとそこでは、ピンク色のパジャマを着た少女が朝食を準備していた。

「おはよ、大輔」

彼女は俺に、『活力が有り余ってます！』とアピールするような無駄に華やかな笑顔を向ける。

「あふあ、おはよー綾菜」

俺とは違い、はつきりと起きているようだ。

俺の返事に頷いた少女は、テレビのチャンネルを変えると、ラップを剥がす作業に戻った。

彼女の名は立島綾菜。俺と同じ年の姉。つまりは双子の姉である。

そもそも双子で姉か弟かなんて意味が無いとは思うのだが、そう決まっているのだから仕方ない。

未だに納得はしていないが。

「ほら、箸とつて大輔」

「へいへい」

言われた通りに箸を二人分机に並べ、椅子に座る。

すると同じ顔が同じように対面に座り、俺達は同時にいただきますと言った。

男女ペアの双子というのは、普通二卵性である。俺達もその例

に漏れないのだが、俺達の顔は妙に似ていた。

顔だけではない。靴のサイズも一緒だし、俺のほうが脚が短いという事もない。

ついでに身長も一緒……165cm。

似るなら似るで、男子の平均身長の方に俺が近づいてから、こいつがぐんぐん伸びればよかったのにと俺が考えていると。

「何、人のカラダじろじろ見て」

「首から上までは認めるが、その下の貧相なものまで視界に収めたつもりは無え」

綾菜が半眼でこちらを睨んでいた。ひどい誤解だ。同じような顔で睨み返してやる。

顔についても身長と同様だ。こいつが男らしい顔つきということはないし、俺がこいつに似ているというのが、屈辱的な事実なのか

も知れない。

「が、こいつの胸も男の俺によく似ているのだから、そこはイーブンといった所だろう。」

「やっぱり人の肢体を舐めるように見てるね大輔。お母さんとお父さんいないからって秘密の遊びとかしないんだからね。」

「朝からそのテンションはなんなの？ 脳を寝違えでもしたの？」

「ちよつと柔らかくなってるのかもね。あ、触らせないよ？」

「朝から脳姦とか想像させんな。」

「近親脳姦。」

「うるせえよ。」

我が両親は、現在世界一周旅行一週間の旅で渡航中である。

そのような訳で、俺はこのふざけた女と一週間協力して暮らさなければならぬのだが、こいつと話していると改めて不安がこみ上げてくる。

俺の繊細な胃に穴が開いてしまわないか心配だ。

「ところで大輔。昨日階段下で、ずっと女子の下着覗こうとしてたんだって？」

考えていると、綾菜がいきなりそんな事を言い出した。

俺はあらぬ誤解にいきり立ち、そんなデマを信じる愚かな双子の姉を糾弾する。

「ふ、覆面してたのに何故!？」

「ちよつと間違えた。焼き魚を租借する綾菜の目が呆れの色に染まる。」

「何でそんなことするの？」

「下着が見たいからじゃない？」

「大輔は死んだらいいのにね。」

再度問いかける綾菜に答えると、物凄く酷い事を言われた。双子の死を願うなんて、この女には血も涙も鼻水も無いに違いない。

「そんな事ばつかがやっていると、本気で皆に引かれるよ。」

更にはそんな事言っつて、本当に心配そうな顔をするのが酷い。

……俺と綾菜の顔は似通っている。だが、一つ違う箇所がある。俺の方が、少し口が大きい事だ。

測ったことはないが、間違いなく大きい。綾菜の口が小さい訳ではない。俺の口が明らかに少し大きい。

この口のせいで下品に見える。この口のせいで……ええと、俺がたかが下着一枚の為に、割に合わない努力をしているなどと邪推されるのだ、うん。

「……ふう、という訳で、今日の後片付けは大輔ね」

「ちよつと待て、何が次元跳躍してそうなった」

「アホな話してたら時間無くなっちゃったしー。あたしの方が準備に時間かかるしー」

言いながら綾菜が席を立ち、二階の自室に向かおうとする。

「ちよつと待て、俺だつてメイクとか……!!」

俺も抗弁しながら、慌てて立ち上がる、と。

ガチャン。机に足が当たり、振動で机の上にあつたお茶が落ちた。

その先は俺の下半身!

「わっっちゃ!」

その熱さに俺は悲鳴を上げ飛び上がる。

階段に向いていた綾菜の顔が、こちらを振り返った。

それを見、俺は慌てて頬を押さえる。

「だ、大輔、チンチン! チンチン!」

言葉は選べ双子の姉。まあそりゃ弟が熱湯にまみれた股間を放置して頬を抑えていれば、動揺して言葉の選択もできなくなるかもしれない。

俺だつて今すぐズボンを脱いで中の物を大気に晒したい。しかし……。

「だ、大丈夫だから。片付けとくからお前は着替えて来いって」

「でも……」

「あとちよつと気持ちいいし」

グツと内股に力を込め、俺は皮膚を剥がそうとするかのような熱さに耐えた。

押さえている手で頬を引き上げ、無理やり笑顔。

罵倒でもしてとつとと去ってくれるかと思っただ綾菜だったが、やはり俺を心配する表情を見せ、少々逡巡してからようやく二階に上がっていった。

……まったく、俺が何の為に日々ローアングルに生きていると思っっているんだ。

しばらくして吹き出物一つ無い頬から、俺はそつと手を離れた。

朝から下着を替える羽目になるなんて、今日は憂鬱な日になる予感がした。

椎名雅

変えた下着一丁で部屋に戻った俺は、そのまま詰襟を着、化粧台の前に立った。

手には赤と黒の縞模様の、二mほどのロングマフラーが握られている。それを首でひと巻き、口の前でふた巻きする。端をそれぞれ体の前と後ろの流し、首元に手を入れ隙間を空ける。

九月とはいえ、いまだ残暑だ。蒸し暑いに決まっている。長いため息を吐くと、それがマフラーの中で渦巻いた。

鏡で自分の顔を確認する。陰気だ。ハンサムが台無しだ。

口の端を上げ笑って見せる。下品だ。特に口が。まあこれで良い。その表情を維持したまま、俺は部屋を出た。

「なんか久しぶりだね、一緒に学校行くの」

「嬉しくないねえ」

なんだかんだで時間が合い、俺と綾菜は並び立って通学路を歩く事になった。

双子が並んで歩くというのは、周囲に双子キャラをアピールしているようで気恥ずかしい。その為普段は俺の方から登校時間をずらしているのだが、綾菜は全く気に留めていない様子で、能天気な鞆を揺らして歩いている。

俺としては、こんなのよりもっと可愛らしい女の子と一緒に登校したいのだ。ついでにその女の子はちよっぴりえっちなさだ。ついでに

あくまで男の子の体に興味があるぐらいのえっちなさだ。ついでにそんなえっちな自分を恥じているとなお良い。それで、なおかつおっぱい大きかったら良い。そんな女の子はいないだろうか。

俺がそんな夢想をしていると……その鼻に香りが届いた。それは大型の花弁を持つ、艶やかで少々グロテスクな色をした花のよう

な匂いである。

その匂いが鼻毛をくぐり抜け神経に触れた時、俺は既に100mを疾走していた。

目指すは前方を歩く少女。彼女こそが、匂いの元であった。狙いは上か下か。俺が両方だと考えを整備した瞬間にも、隙は無かったはずだ。

しかし、手が届く直前、少女の体が視界からふっと消える。

「え？」

伸ばした手が取られ、天地が逆転する。

景色がスローモーになり、頭の中で中学時代の友人、上杉が俺に告げる。

『首を上げるんだ』

ドダンッ！ 次の瞬間、俺の体は思いっきりコンクリートへと叩きつけられていた。

「いぎやあああああああっ！」

その衝撃に、俺は思いっきりのた打ち回る。

そして俺を一本背負いで投げた少女は、嫌悪感を顔にしなからウエーブのかかった金髪を揺らし、俺を見下ろしていた。

「シネッ」

「いや、普通に死ぬるからね！？ のごおおお！」

ちよっと変わった抑揚で吐き捨てた少女に叫び返し、俺はまたのた打ち回った。

のた打ち回りながら説明しておこう。

彼女の名前は椎名雅。ミルクが混ざったような淡い金髪が示す通り、北欧系のハーフである。背は小さいが乳と尻の発育はよろしい。トランジスタグラマーというやつだ。

しかしこの通り、運動神経と反射神経はとても素晴らしく、動きにも隙がない為鈍重な印象はない。足首も腰もキュツと細く、まるで蜂のような少女だ。

俺と同じ高校に通う一年生。 ついでに水泳部の後輩で、期待の

エースでもある。

あまり日本人の特徴も無いので、皆はミーヤと呼んでいる。

「ちなみに下着の色はライトグリーンである」

「やっぱりシネツ！」

「ごめんなさいごめんなさい！」

ミーヤがゲゲシと蹴りつけてくるので、俺は丸くなってそれを防いだ。蹴るにしてもつま先を使ったトゥーキックなところが恐ろしい。

俺がその恐ろしい蹴りから必死で身を守りつつ、あわよくばもう一度じっくり下着を見ようとしていると。

「どろどろどろ」

そのミーヤの体を、羨ましい事に後ろから羽交い絞めにした奴がいた。

ミーヤはキツとそいつを睨んだが、その正体に気づくなり相好を崩す。

「ア、綾菜センパイ！ おはようございます」

彼女は羽交い絞めにされたまま、それをしている綾菜に弾んだ声で挨拶をした。

俺の時とは声音が違う。更には目が輝き、きめ細やかな肌に赤みが差した。

椎名雅は、水泳部の部長でもある立島綾菜に、先輩という以上の感情を持っている。

何故か分からないが、彼女は綾菜を先輩としてというより一人の女性として敬愛しているのだ。

彼女から漂う香りは百合の花なのかしらんとぼんやりと考える。ふと気がつくと、俺達の騒動を見て、周りの生徒達が何事かと足を止めていた。

しかし、やらかしたのが俺と知れると苦笑いをして去っていく。女子が近くを通ってくれないのも含めて人徳だろう。

「中々シャレにならないやりとりしてるね」

綾菜はミーヤに笑顔でおはようと答えてから、俺に手を差し出した。

「ふっ、この程度我々の中では初級のスキンシップさ」

その手を取らず、俺は立ち上がる。 実際ミーヤとはほんの一瞬しか触れ合えなかつたわけだし。

「訳の分かんない事言ってるな。怪我は？」

「上杉に教えられた受身が無かつたら、死んでいた……」

「上杉？ 誰それ」

「薄情な奴だなお前は。ほら、中学の時、柔道部でお前に惚れてた」

「それ小池じゃない？」

「そっちなかも」

「フられた奴だし、どっちでも構わないだろう。」

とにかくその命の恩人に心で礼を言っておいて、俺はミーヤのほうを見た。

「……ムッ」

すると、やはり睨みつけられる。 しかし、その睨み方は先程より力がない気がする。

あ、もしかして流石に背負い投げはまずかつたと後悔してる？

よし、つけこもう。 一瞬で決意し、俺は言葉が発した。

「いやー、今の投げで股間強打しちゃって、できればペロ……ごめん今の無し」

と、言いかけた所で、今度は音が出そうな勢いで睨まれた。

決断はともかく、発する言葉はもうちょっと練れば良かった。

あとチャックに手をかけるの遅らせれば良かった。 というかマジで怖い。

「なんで背中と股間両方打てるの。 ていうか怪我してるのは手」

「お？」

ビビっている俺に、綾菜からまともなツッコミが入った。

いや、モノの長さによつては両方打ち付けることも可能と抗弁することもできるが、それは置いておいて。

「というか手？ 言われて俺は右手を見る。するとミーヤとスキンシップを取れなかった方の彼は、更に不幸な事に受身を取った影響で、より強く地面に叩きつけられていた。」

「おかげで背中への衝撃は抑えられたようだ。だが、代償として右手は赤く腫れ、表面からぽつぽつと血が浮き出していた。まあ、怪我なんて大げさなものではない。」

「こんなもんペロれば直る」

「気持ち悪い動詞作るのやめてくれる？」

「言いながら、綾菜がポケットを探る。」

「ほれ、ハンケチ持つてる綾菜さんに感謝しな」

「そうして綾菜は俺の手を取ると、ハンカチで血をぬぐっていった。ハンカチにはクマかネズミかカエル判別がつかないが、とりあえずファンシーなキャラクターがプリントされている。」

「そして全体的にピンク。更にはフリル。今時小学生でも持っているなさそうなシロモノだ。」

「服装はそうでもないのだが、この女は小物となると急にかわいこぶりっこな物を集めだす。」

「その恥ずかしいハンカチで俺の体中の埃を払った綾菜は、更に顔にまで手を伸ばしてくる。」

「っ！……やめる！」

「そのハンカチを、俺は咄嗟に奪い取った。」

「突然大声を上げた俺に、綾菜が目丸くする。」

「あ、その、恥ずかしいだろ……」

「そ、そっか、ごめんね？」

「慌ててそう言うと、綾菜は謝りながらおすおすと手を引っ込める。その、周りの目とかばつが悪くなった俺は、ぶつぶつと心の中で言い訳をしながら、顔……はよして手をもう一度拭きなます。」

「そうだ、ただでさえミーヤの視線も鋭くなってるのに……。」

「ペロる？」

「ガLLLLLLLLL。」

睨むミーヤを見、右手を差し出すと、歯を剥き出して唸られた。
ガブられないだけ良かったと思う。

「ごめんね、ミーヤ。びっくりさせちゃって」

「イ、イエ！ 悪いのはダイスケですカラ！」

「呼び捨てかい」

ツッコミも入れるが、聞く気配が無い。彼女は綾菜の傍に寄ると、背伸びをしながら綾菜の様子を心配そうに窺った。

俺を投げ飛ばした事など既に頭の中にはないようだ。そもそもこの少女には、入部した当初から俺を敬う気配がまるで無い。

最初に彼女が入部してきた時は、確かに俺も紳士的に振舞ったはずなのだ。

だが当時からミーヤは俺の事を睨みつけて来、どうにかして仲良くなれないかとスキンシップを取り続けて半年。

「アンタなんて、ダイスケでジューブン！」

こんな仲になりました。

有馬某と三橋愛華

ザバァン。

飛び込み、長めに潜水し、水流に導かれ水面に顔を出し、水を叩きまた短く潜る。

この動作で何故前に進めるのか、たまに不思議に思うことがある。そして、そんな疑問が出る時は、大抵良いタイムなど出ない。

「

」
告げられたタイムを聞き、俺はため息をついた。自己ベストからは程遠い結果である。

タイムを計る時は無心。隣で同じくタイム計測を終えた綾菜も、前にそう言っていた。

その綾菜は、またしても自己ベストを塗り替えたのだろう。自らのタイムを聞いて嬉しそうにしている。

「冴えないですねえ、先輩」

俺がそれを苦々しい気持ちで見ていると、頭上からそんな声をかけられた。見上げると、3と書かれたスタート台の上に、ストツプウォッチとバインダーを持ったまま膝を抱えて座り込む少女がいる。先程俺にタイムを告げた、我が後輩だ。短い髪を両サイドで無理やりまとめた子供っぽい髪型だが、それで隠し切れない利発さが、その大きく好奇心の強そうな目にはじみ出ている。

「それはタイムが？ 表情が？」

「両方です。ていうかそんな顔してると、人生まで冴えなくなりますよ」

「君がいるからそれはない。 毎日がバラ色さ」

「はいはい」

つつかそこにいられると、プールサイドから出ざるをえないのだが。

第一コースではミーヤが計測中なので、迂闊に移動できない。

もし、万が一、不慮の事故があつて彼女と追突しようものなら、あまつさえ水着の中に手が入つていやんとなつてしまえば……今度は命の保証が無いだろう。

スキンシップは一日一回にしようよ、先週反省したばかりだ。

しかし水中に隠れている二つの膨らみを想像すると、なんだか勇気が沸いてくる。

……命賭けちゃうか。

「でい！」

そんな事を考えていると、いきなり頭をバインダーの角で叩かれた。

「痛いなあ。 何をするのかね」

「いえ、先輩が覚悟を決めた男の顔になつていたので。 気持ち悪いじゃないですか」

「ちよつと待て！ デレつとした顔して怒られるなら分かる！ 引き締めて気持ち悪いってどういうことだ！」

それならハハアン、ミーヤに見惚れた俺に嫉妬してるなとか言えるだろうに、キメ顔が気持ち悪いと言われてはどうしようもない。

「そっちは先輩のデフォ顔ですし」

「マジで？」

「マジで」

俺、普段はそんなに気持ち悪い顔しているのか。 ショックを受け、俺は自らの顔をペタペタと触り、確かめた。

「造詣に関しては心配しないで大丈夫ですよ。 部長そっくりですし」

「……あつちが俺に似てるんだ」

俺が目指しているのは、渋みのあるダンディーフェイスなので、女にそっくりと言われても嬉しくない。

というか、綾菜が部長と呼ばれるのも未だに慣れない。

一年の時はサボリ魔だったくせに二年からは急に真面目に部活に没頭しだし、今ではすっかり慕われる部長だ。

俺が綾菜の顔に部長の肩書きをハメこめずに首を捻っていると、奴がその視線に気づき、こちらを見て同じ角度で首を傾げた。似た顔でそんな事していたら、多分物凄く滑稽だろう。

プール上の女が、何やら微笑ましいものを見るような目でこちらを見ている。不愉快なので首の角度を戻す。同時にあちらの首の角度も戻された。

しっしと追い払う仕草をすると、あちらも同じ仕草をする。と見せかけて、俺の顔に水をかけた。まともに食らった俺がやり返そうとする前に綾菜は水中に潜り、プールサイドから上がったいった。「やっぱり部長のほうが、上手ですね」

そう言えばこういったやり取りで、俺がアイツに勝った試しがない。

こんなんだから万年弟ポジションなのだろうか。昇格出来るものならしたいものだ。

「とにかくあがるぞ。ほら、手え貸せ」

プールサイドから上がる姉の尻なんざ見ても、何の嬉しさも無い。俺もプールから出ようと決め、少女に手を伸ばした。

ここにいても、この女の股間しか見られないしな。こちらはまあそれなりに、想像力の働かせ甲斐のある光景だけれど。

「はいはい」

不承不承という感じで、少女が俺に手を伸ばす。多分俺はデヘツとした顔をしたはずなのだが、まるで気付いてない。

やはりこれが通常顔だと思われているのか。シヨックを受けつつ彼女の手を取る。

彼女を支えに体を引き上げながら、俺は愛しい少女の名前を呼んだ。

「ありがとう、馬鹿子……」

「あ？」

その瞬間、手が放されました。

ザッパンという派手な音と共に、背中から水中に戻る俺。急な

事だったの、ちょっと水を飲んだ。

「あにすんだ馬鹿子！」

「誰が馬鹿子ですか！」

「そのまんまだろうが、そのまんま！」

女の子に馬鹿子はないだろう。あなたはそんな風に思うかもしれない。しかし彼女の名前を聞けば、誰もが俺のあだ名に納得するはずだ。

では聞いていただく。

彼女の名前は、有馬鹿子。

マジで。一応言っておくと、ありましかこと読む。

本人はこの素晴らしい名前を好いていないようで、これを言うときごく怒る。

ミーヤと同じ一年生だが、体の発育があまりよろしくない。ただしスラリとした足を持ち、細い体に薄く脂肪が乗っているので、特定の需要はあると思われる。

「次言ったら、ここが断崖絶壁でも同じ事しますよ」

「すみませんでした」

そもそもそんな状況に陥ることが無いとは思っただが、ここは素直に謝っておいた。

「ていうか、そうじゃなくて」

しかし鹿子は、人を落としておいてそんな事はどうでも良いと言いたげに手をパンと打ち付ける。

「そうじゃないって？」

「先輩、手に怪我してたでしょ」

俺が尋ねると、鹿子は飛び込み台に両手を突き、前かがみで尋ねた。

「あ、ああ……怪我って程のもんじゃないけどな」

鹿子が言ったのは、今朝掌についた擦り傷の事だろう。痕は残っているが、もちろん血は止まっている。

そんなに目立つものでもないと思っただが。

「今朝、ミーヤに投げられたんですっけ？ よく無事でしたね」

本人から聞いたのか、鹿子が思い出したように言う。

部活の同じ一年生ということもあって、二人は仲が良いようだ。

ミーヤって俺のことどんな風に話すんだろ。

気にはなつたが墓穴を掘りそうなので適当に答える。

「小杉の魂が守ってくれたんだ」

「誰ですかそれ」

「忘れた」

そう答えると、俺が適当な事を言うのは慣れたものでも言うように、鹿子は肩を竦めた。

まあ説明しても、あいつが鹿子と付き合うなんてミラクルは起きないだろう。

そもそもそんな奴いないし。

同じくおおげさに首をすくめた俺は、再度手を差し出し、やり直しを要求した。

鹿子もそれに応えようと手を伸ば……。

「どいてくださいますか？」

そうとした所で、後ろから声が響いた。

その声に後ろを振り返った鹿子が、ヒツと飛びのく。

なんだと俺が訝しんでいると、スタート台の後ろからひょっこりと顔が出た。

いや、顔を出した少女がいた。

「大輔さん、お手を」

このプールにあつて、唯一水着を着ていない女。推奨されているジャージ履きすらしらない女。制服でいながら水滴一つ被らない女。

水泳部でただ一人のマナージャー、三橋愛華であった。俺と同じ二年生。彼女は俺に手を差し出すと、片手でその豊かな黒髪をかき上げた。

「あ、普通に上がれるからいいよ」

やろうと思えば普通に一人で上がる事はできる。実践してみせると、鹿子が恨めしそうに睨んでいた。……本当は俺が水に沈めてやろうとしていたのは秘密だ。

「あ、では大輔さん、タオルです」

と、三橋はそれにもめげず、そそくさと俺にタオルを差し出した。

俺の私物ではない。かと言って、この部にそんなものが用意されてる訳ではない。

彼女が用意したものだ。ついでに言えば俺以外もらってない。

「ええと、ああ、うん、自分のあるから」

俺はそう言って、さりげなく彼女の好意を無碍にした。

「そ、そうですか」

シユンとしながら、愛華はタオルを引っ込め、鹿子からバインダ―をひったくった。

そりや見事に、顔はシユンとしたままひったくった。

「タイムも私が計りましたのに」

「いや、君小数点切り捨てするじゃん」

言ってるそばから、鹿子が書き込んだタイムの下一桁を書き直している。

そつだ、そうなのだ。俺は彼女にえこひいきされている。露骨に。しかも稚拙に。

「そ、それじゃ私はこれで……」

鹿子がそう言って、そろそろと退散しようとする。

三橋が振り向き、彼女に視線を向けると、鹿子は本当に逃げるように去っていった。

こちらからはどんな表情をしたのか見えなかったが、あまり関係が良好とも見えない。

「あんまり後輩脅すなよ」

「あの子は女狐です」

真顔でそんな事言われたら、誰でも吹き出すだろう。少なくとも

も俺は吹き出した。

「じゃあ俺は、あの娘に化かされてる訳だ」

油断したら、ケツ毛まで抜かれて、断崖絶壁から叩き落とされるともいうのか。

面白くてつい乗ってしまっただから、三橋の顔が真剣そのものである事に気づく。

ついでに俺の同意を受け、その可憐な鼻の穴がちよいと膨らんだところまで見えた。

「そ、そうです！　いえ、大輔さんなら分かかってて弄んでいる事もわかってます！」

そんな事を勢いこんで言われても困る。俺の部内での評判ってどうなってるんだらう。ちよつと人生を振り返りたくなる。

「俺、君の事は弄んだつもりないんだけど」

「ほ、本気ということですか！？」

「そうじゃなくて」

コナの一振りもかけてないって言いたいのだよ。

興奮した様子の三橋を、俺はどうどうと宥めた。

……さて、そんな餌も何も与えてない彼女、のはずなのだが。

良いだらうか。意外と思われるかもしれないが、女性経験どころかお付き合いの経験すらない俺が言ってしまうって良いだらうか。

まあ勘違いであれば勘弁していただこう。

この女は、俺に惚れている。

世の中のイージーラブを満喫している兄ちゃん風に言うなら、ヤシる。もしくは彼女は、俺を騙してケツ毛筆って集めようとする特殊性癖だ。ただ、鹿子もそうだが、俺のソレにそんな価値があるとも思えない。

しかし、俺は彼女を受け入れられない。それは三橋が怖いからでも、女性との付き合い方が分からないからでもなかった。いや、それもちよつとはあるけど、大元はあくまでも、俺自身のちよつぽけな問題のせいである。

「ごめん、弄んでるかも」

俺がそう答えると、三橋は何故かとても満足そうな顔を浮かべた。そして俺が彼女に冷淡になりきれず、対応が中途半端になってしまったのは、結局のところこの笑顔が可愛らしいと思ってしまうせいだった。

脅迫　そして…

「つつ訳で、今日の連絡終わり」

目つきの悪い。いや、殺人によってリアルなEXPをつまないとそんな目にはなれないであろうってな凶悪な目つきをした男がそう言った。

山本いるか。容姿との合わせ技で有馬鹿子級の面白い名前を持つが、見た通りれっきとした男性である。我が水泳部の顧問で、二十四才体育教師。

元はオリンピックの強化選手だったとか聞いたことがあった気がするが気のせいかもしれない。

水泳部のメンツは、マネージャー一人を含めた七人。

それが彼の前で整列し、その言葉を聞いていた。

我が水泳部の活動はこうやって並んで整理体操をし、更にはいるかちゃんから今後の予定なんかを聞き（今ココ）、いるかちゃんがそんじゃ解散と手を叩いて終わる。

「どうしたんですか先生」

しかし、連絡が終わってもその一本締めが来ない。

綾菜が部長らしく率先して聞くと、いるかちゃんは言い忘れたとこがあったと付け加えた。

「お前から今日は早く帰れよ」

「んな小学生じゃあるまいし」

「ちげえよバカ大輔、バカ」

最近の教育者というのは、繊細な生徒にモンスターペアレンツの併せ技で、発言に細心の注意を要すると聞く。

こうやって本当は頭の良い生徒をバカとか言っただ大丈夫なのだろうか。しかも二回も。

まあこの目つきの悪い体育教師に機嫌を窺われ、ニコニコと大輔くうんなどと呼ばれた日には、あれやこれがバレたのだと死を覚悟

するしかなくなるだろう。

「じゃ、マジでなんなんですか？」

という訳で、俺も彼に罵倒されるのを気に病んだことはない。
改めているかちゃんに問い返す。

「なんか警備システムがイカれちゃったとかでな。しばらく直らないらしい」

「警備システム？」

「ほれ、敷地内に人が侵入すると警備会社に連絡がいくつてやつだよ」

「ああ……」

流石に夜の学校に進入した事はないのでお世話になった覚えはないが、うちの学校にもそんな物が導入されていたらしい。

安普請だと思っではいたが、最低限のラインは守られていたようだ。

「しかも最近物騒だからな。早く帰るに越した事はない」

いるかちゃんが指すのは、最近この街で起こってる連続失踪事件の事だろう。

その数は分かっているだけで十人近くだったか。少し前までは個々のちよつとした事件だったそれが雲のように寄り集まり、最近一つの大きな事件として形を成し始めた。

流石に自分の上にそれが降りかかるとは誰も真剣には考えておらず、そもそもこれが人為的かもはつきりしない。

しかし、何となく陰鬱な影が街を覆い始めていた。

「ん？」

と、何か視線を感じ、俺は考えを中断し顔をあげる。

周りを見回すが、誰が俺を見ていたかは分からなかった。

「だからって、盗みに入ろうなんて思うなよ」

強いて言えば、今ギロリと、いるかちゃんが俺を睨んだ。

「夜のプールなんて興味ないッスよ。マーメイドでも泳いでるなら喜んで来ますけど」

あらぬ誤解を受けているようなので、俺は慌てて否定した。
更衣室に水着や下着を忘れる女子も居まい。 ていつか下着穿き
忘れる女子なんて居たら、そっちストーキングするわ。

その光景を一瞬想像して顔を緩ませた俺を、いるかちゃんは教育
者にあるまじきあからさまな疑いの目で見た。

「つつか何で俺だけなんスか。平井にも言ったださいよ」

言いながら、俺は後ろで並んでいるもう一人の男子部員を振り向
いた。

「平井はお前と違って人徳があんだよ」

「あはは……」

気弱そうに笑った紅顔の少年は、平井洋一。

俺と同じ二年生であり、俺以外で男子部員はこいつしかない。

確かに俺より小さい体の全身で自分は善人ですアピールをしてい
る気もする。

でも俺は、こいつが無類の褐色好きである事も知っているのだ。
ただし、日焼け痕は褐色とは違うので、それ目当てに入部した訳
ではないらしい。

俺には基準が分からん。

「前世で修行が足りなかったかな」

まあ、しかしそれを女子の前で暴露してやるほど俺も鬼畜ではな
い。

肩を竦めて前に向き直った。

「お前はもうちょっと身近な所反省しろ」

「ちょっと影が濃いぐらいのほうがいいが、女の子もキュンと来るんです
って」

ねっ。と同意を求め周りを見るが、猛烈に頷いたのは三橋一人だ
けだった。

いるかちゃんのほうは呆れきった目で俺を見ている。

「ま、当直に俺もケイゴ君もいるからな。じゃ、解散」

で、キリがないと判断したのか、そう言って手を打った。

ケイゴ君？ そんな先生いたつけと疑問には思ったが、あんまり皆を拘束しても俺の人徳は積まれそうにないので、とりあえず流しておく。

水着一丁で立ちっぱなしは辛い時期になってきたしな。

そんな俺の密かな気遣いで健康が守られた麗しき女子達が更衣室へと歩いていく。

俺も伸びをし、男子か女子の更衣室に向かおうとしたのだが、そちらとは反対方向に歩いていく少女がいた。

彼女はプールサイドにある倉庫の前で立ち止まると、何の変哲もない長方形のそれをじっと見つめている。

何となく足音を殺して近寄ったが、彼女のほうが先に俺に気づいて、振り向いた。

「ひっ」

んで、飛びのいた。その瞳には、はつきりとした怯え。

こりや俺から声かけなくて良かったなと苦笑する。

「あ、あの、ごめ」

「開けずの扉か？ ダメだぞ、開けちゃ」

謝罪を遮り、今度はきちんと笑顔を作って彼女に話しかける。

これだけ明確に顔に表れていても、彼女の口から俺に怯えたのだと聞くのは耐えられなかった。

開けずの扉。開かずの扉ではない。この倉庫は今引退した水泳部の先輩達、そしているかちゃんから開けるなときつく指示されている謎のスペースだ。

鍵も掛かっており、開けたくても開けられないので俺もその中身は知らない。

「え、あ、うん」

言葉を遮られた少女は、叱られた子供のようにしゅんとしながら頷いた。

彼女の名前は、片瀬姫足。姫足と書いてひだりと読む。

部内がこんな変わった名前ばかりだと、自分も役所に駆け込んで

変えてもらいたくなるが置いておこう。

おかつぱの髪。色素の薄い肌。色々特徴はあるが、俺が一番羨ましいのはその小さい口か。

俺のようにあまり無駄に喋らないのが維持のコツなんだろう。

自虐しながら考えた。

「なんか気になることがあるのか？」

俺が彼女の横に立つと、また一步距離を開けられる。

俺は見なかった振りをするのだが、彼女は可愛そうなくらい縮こまった。

怯えられるのが怖いくせに分かっていてやるんだから、俺はサドとマゾを併発してるのかもしれない。

ミーヤが入部当初から俺に敵対的であるのと同じように、彼女も転入してきた当初から、何故か俺に対し怯えるような仕草を見せていた。

そうそう、彼女は転入生である。俺達が二年に上がると共にこの学校に入り、ミーヤや鹿子と一緒に入部した。

何でこの時期に？と思わないでもないが、まあ人には事情があるだろう。俺に怯えるのにも、恐らく事情があると信じたい。

「なん、となく……」

「そっか。別に変な匂いはしないな」

「に、匂い？」

扉の前でスンスンと鼻を動かすと、片瀬が怯えながらも聞き返してきた。

さっきの様子と言い、彼女も怯える事に罪悪感はあるらしい。

ならば、ちょっとずつ慣れてもらうのが一番だろう。

「いるかちゃんが殺っちゃった部員が入ってるのかと」

「ヒッ！」

軽くジョークを言うと、今度は明確に片瀬が悲鳴を上げて後ずさった。

いるかちゃんの容姿的に、ちょっとありえすぎる話だったかもし

れない。

「冗談だよ冗談」

にいつと口の端をあげると、彼女は引きつりながらも笑顔を返した。

入部した当初は、彼女に話しかけるとブルブルと震えた後、猛ダツシユで逃げられていたし、それに比べれば大した進歩かもしれない。

もしくは足が凍り付いて動かないだけかも知れないが、悲しくなるし考えないでおこう。

「あんまり気になるなら、いるかちゃんに鍵借りてみようか？」

「え、だだだ、大丈夫。ほ、本当に、きき気のせいだと思う、かから」

「そっか」

震えながら話す彼女は、壊れかけのレイディオのようだ。

一生懸命喋ろうとしてくれているのは嬉しいが、これ以上やるとタンのみじん切りという前代未聞の物体が出来上がる気がする。

「せんぱーい。何を女の子虐めてるんですか」

どうしようかと俺が考えていると、背後から声がかかった。

脳を一片も使っていないような声である。振り向くとやはりその主は、有馬鹿子であった。

先程三橋に釘を刺されたようだが、懲りずにこちらへちよっかい出してくる。まあ避けられるよりずっと嬉しいけど。

「虐めてた訳じゃねえよ。つつかお前を虐めてやるうか」

俺がガーンと牙を剥きながらそう返すと、鹿子は片瀬を少しは見習って欲しいぐらいの軽薄さで「やだ怖い」とのたまひ、近くまで歩いてきた。

それから、「どうしたんですか？」と首を傾げる。

姫足がまた一歩引く。俺だけに怯えるわけじゃないんだよな、

この娘。

それに安心する自分にちよっと引く。

「いや、この倉庫がなんか」

その後ろめたさを誤魔化すべく、俺は鹿子に事情を説明するため、再度倉庫に顔を向けた。

と、同時に、いいタイミングで開けずの扉の間から、ばふっと埃が飛び出して来る。

何で、どうして、と思う前にそれを反射的に吸い込んでしまう。

まずい。俺は直感でそう感じた。

まずい、まずいまずいまずいまずい。

片瀬を押しつけるようにして 押しつける前に彼女が退いたが、倉庫の脇、プールを囲む金網を掴む。

あれが、出てしまっ！

「ぶわつくっしょい！！」

堪えられず、俺は特大のくしゃみをした。

すると、バリ！ ガシャン！ と大きな音を立て、世界が傾いた。俺はそれに耐え切れず、爪先立ちになりやがて重力に身を引かれ、ていく。

先程まで身を委ねていた金網さんが、まるでコントのセットのようにはずれ、重力に身を任せてしまったのでしょうがない。

ドスンッ。

そんな訳で、俺は壊れた金網と共にプールの外へと落ちた。

プールの裏は、ランニングコースにもなっている林である。

冷えた土が裸の胸に心地良い。

俺は金網さんに覆いかぶさるラッキースケベを味わいながら考えた。

本日三回目の落下である。地面が俺に熱烈なラブコールを送っているのだろうか。

これだけ彼女にモテるのは、俺がジャムを塗ったパンぐらいなものだろう。

「だ、だ、大丈夫……？」

頭上から姫足の声が聞こえる。俺はうつ伏せのまま、それに応え

ない。

お互い、しばしの沈黙。俺は頬に触れてから、勢いをつけて立ち上がった。

「ていうかあり得ないだろううちの学校！ どんだけ設備費ケチってるんだよ！」

「ヒッ！」

節度を持って叫ぶと、上にいる片瀬が引きつった声を上げた。

「あ、ごめん」

まあ半分ワザとだけど。

片瀬にどくように言って、俺は金網をプールに押し上げた。

「お、屋上じゃなくて、良かった、よ」

「さりげに怖い事言いますね、片瀬先輩」

フオローなのか冗談なのか判断がつきにくい彼女の発言に、鹿子がつつこんだ。

片瀬に手を借りて上がるのかと思っただが、流石にそこまではしてくれそうにない。

もっかい鹿子に途中で手を離されたら今度こそ大惨事だ。

仕方なく自力でプールに舞い戻って、ぽっかり開いてしまったフェンスの隙間を確かめる。

「やっちゃんいましたねえ、先輩」

「ど、どうしよう」

「何も今日壊れなくてもいいのになあ」

警備システムがいかれてるって時にこんな穴が開いてたら、入って下さいと言っているようなものだ。

どうしようと考えながら、金網を元あった場所にはめてみた。

するとぴったり。おめでとう君がシンデレラ。

そりゃ当たり前だが、手を離してもこれがはずれない。

「お、いけるじゃん」

更には折れた場所も、注意しないと分からない程になっている。

「あ、あぶなく、なく、ない、かな？」

「いや、ガムテで補強するといかにもここが脆いですよって敵に知らせる事になるし」

敵。 まあ下着泥棒とかそんな奴だ。 言いながら、俺は更衣室の方を見た。

先程の派手な音のせいで、戻ってきたらしい三橋も含め、水泳部の皆がこちらを見ている。 俺は意味も無く彼女らに手を振った。

三橋だけが手を振り返したのを確認して、俺は片瀬と鹿子に向き直る。

ビクツ！ と、片瀬の肩が大きく震えたがなるべく気にせず彼女に言った。

「明日俺がいるかちゃんに言っとくよ。とりあえず今日はこれってことで」

なんなら明日、さりげなくいるかちゃんをここに誘導しても良い。壊した責任を押し付けてしまえば万々歳だ。

「う、うん……」
渋々なのかおどおどなのか判別がつかないが、とにかく片瀬も頷いた。

「私は関係ありませんから」
なんかつれない事を言っている女もいるので、出来れば当日この女にも責任を被せたい。

まあともかく鹿子にも了承を取れたってことで、悪魔の契約成功だ。

「しかし、いきなり埃のぶっかけとは」

「日ごろの行いの所為じゃないですか？」

「うっせ」

鹿子をあしらいながら、不思議に思っ、再び開けずの扉を見る。なんだか俺も中身が気になってきた。

倉庫ちゃん倉庫ちゃん。オープンユアハート。 などと念じながらさすると。

『見つけた』

声が、聞こえた……気がした。

片瀬と鹿子を見るが、二人ともどうしたの？ とばかりに首を傾げている。

え、まさかコイツ？ と、開けずの間の鍵穴をクリクリと弄ってみるが冷たいものだ。

幻聴だったのか？

心に聞いてみるも返事はない。 ちよつと大地の声聞きすぎたかも。

土のついた頬を、俺は撫でた。

「はああ」

下を向くと、ため息が自然に出る。 俺が前に倒れないように。 ブレスの力で支えてくれているのだろうか。

そんな馬鹿な事を、俺は黄昏時の廊下を歩きながら考えた。

「どつたの大輔、そんなに部活疲れた？」

横を歩く綾菜は、まったくもってそんな様子を見せていない。

「俺はお前みたいに、水につかるだけで元気になる水生生物とは違うの」

「白魚のような手なのは認めるけど」

言ってる。 しゃあしゃあと言ってる。 鼻からも息を吐いて姿勢制御を助ける。

「モテるからね、大輔は」

「唐突に痛烈な皮肉とかやめてくれる？」

確かに色んな女の子との関わりで疲れた訳だが、別にイチヤイチヤラブラブなやり取りが行えたわけではない。

「モテないからね、大輔は」

「前言翻しすぎだろ！？」

先程の発言に何のこだわりも無く言い直す綾菜。

確かに俺に人徳かモテオーラがあれば、今日の出来事もクールに

受け流せただろうがそうはつきり言われると辛い。

「あはは、元気じゃん」

「……今のが最後の元気だ。これ以上疲れさせたらおぶって帰らせるぞ」

「おぶっても良いけど行き先は姥捨て山になるからね。んじゃ、しばしお別れ」

何だか恐ろしいことを言いながら、綾菜は下駄箱の反対側へと移動する。

俺も下駄箱の前に立ち、それに手をつつ込むと、指が靴以外の何かに当たった。

覗き込むと、それは、二つ折りになった紙だった。

「いやいやいやいや」

期待するにはまだ早い。ああいう手紙は、ハートのシールで封をされていると決まっている。更に中身が例えそういうものであるとしても、本当に女の子が、しかも可愛い女の子がいて、更にはそれが男子の純情を踏みにじる罠でない可能性はかなり低い。

いや、でも万に一つはあり得るかもしれない。開けない限り中身は分からないのだ。

……よし！

哲学的に意を決し、俺はそのラブレターを取り、広げた。

中にはシンプルな一文。

「お前は化け物だ」

「あははははははは！……バリッ。」

「ど、どうしたの大輔!？」

突然笑い出した俺に、向こう側から、綾菜が慌てた声を上げる。

「いや、何でも、何でもない」

言い返してから、俺は口元を押さえた。

手の中には、しわ一つ無い紙片。裏返してみると、更に続きがあった。

バラされたくなければ、今夜二十二時に校舎裏へ来い。こりや惚れざるをえない強烈なラブレターだ。

差出人を書き忘れてるから、ドジっ子かもしれないが。

俺もこの手紙には、誠心誠意応えねば……なるまい。

ミミック（擬態の方）

“彼女”が学校の裏門に到着したのは、二十二時十分であった。辺りは既に闇に包まれており、時たま後ろを車が通る程度で人通りもない。

鉄門扉の裏門は取っ手に足をかけるコツさえ知っていれば、簡単に乗り越える事が出来る。

警備システムが死んでいることは確認済みであった。

左右を念入りに確認した後、彼女が門を乗り越えたその先は、ラニングコースの林へと通じている。

進入に成功した彼女は林の中を慎重に進んだ。幸いにも月明かりによって視界が不自由になる事はない。

目的地はこの学校の校舎裏である。

三分ほど歩いて校舎裏に辿りつくくと、そこには先客がいた。学生服の男である。

彼女はその男に気づかれないように、林の陰に隠れると、彼の様子を観察し始めた。

制服を着た男は、まだ残暑の厳しい九月だというのに厚手のマフラーを巻き、落ちつかないに、それを口元に上げたり、熱そうに首元に手を入れたりしている。

月明かりに照らされた物憂げなその顔は、低めの身長と併せて彼女を少女のようにも見せた。

相手が自分に気づいていないと確信した彼女は、次にどうしようかと考えをめぐらせ始める。

そんな時。

「ぶっ」

先程まで、ともすれば怯えた様子だった男が、急に吹き出した。

「ふふふふ、あは」

この状況にあって、何故。彼女が相手の真意を図りかねている間

に大きな音が鳴るようになっていた。

その音の正体は肥大化した男の歯、もしくは牙である。男の歯はいつの間にか大根のように大きく、氷柱のように鋭く変形していた。それに併せて彼の頭部自体が、常時の三倍ほどの大きさにまで膨れ上がっている。あるいは頭に箱を被っているようにも見える光景である。

しかしその頭には、ゴムのように伸びきった、少女にも見えたはずの顔が、歪んで張り付いていた。

比率もめっちゃめっちゃ。まるででたらめ。こどもものらくがき。

生き物であるかすら判別がつかない怪物に、男は一瞬で変わってしまった。

いや、違う、アレは……化け物だ。

人の皮を被っていた化け物が、今まさにその皮を破り、正体を表したのだ。

「ひやは、ひや、ひやは……」

笑いが、収まっていく。

がくんがくんと揺れながら、その視線が下へと戻っていく。

「ひやはあ、あ？」

いつの間にか茂みから大きく顔を出していた彼女と、目が、あった。

食われる。

本能でそう察し、彼女は悲鳴を上げて逃げ出した。

ラブロマンス

逃げ出した少女を、俺は笑い顔で追いかけていた。

口の端が上がってれば笑い顔と定義するなら、これは笑い顔で相違ないだろう。

その頭が胴体の二倍ほどになり、象牙のような歯が並び、その間から腕ほどもある舌が飛び出していたとしても、である。

「ヒヤ、ヒヤハ！ ヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

口を開く度、上顎、というか頭の上半分がカパカパと炊飯器のように九十度上を向き、その度に俺の視界が月を捉えようともた。

夜の学校で、異形の化け物が少女と追いかけて。 三流ホラーのような光景である。

しかし、これはあくまで現実であり、俺は目の前を走る少女を捕まえ。

「ヒヤ、ホヒヤ、ゴキヤ…誤解だあ！！」

説得しようとしていた。

そりゃそうだ。取って食おうなどとは思っていない。 そんなの一度もした事はない。

少女を追いかけるうち、ひたすらに重く喋り辛かった顔が、穴の空いた風船のように段々と縮んでいく。

しかし口の端は依然破れたままで、剥き出しになった歯茎と尖った牙が、さつきからありましたよとでも言うように耳まで続いている。

自分の口が、顔が、頭が何故こんなおかしな事になっているのか。俺は知らない。

生まれる前からこんな、人間の皮を被った化け物として生まれてきたのか。それとも何かのきっかけでこうなってしまったのか。

ただはつきりしている事は、俺が大きく口を開けば唇の端が破れる事。

更に大きく笑えばそれが首の後ろまで行き、頭まで巨大化していくと言う事だ。

そのおかげで、俺は笑う時はもちろん、あくびにも気を使わねばならない。

頬にイタズラなどされないよう、親しい友人を作る事も避けてきた。

今までだってバレそうになったことはある。今日なんて二回もあった。

それでも、それにしただって、こんな致命的な事は初めてだ。

「待て！ 違うんだ、これは……！」

呼び出したからには、相手だって知っていて然るべきだと思っていた。だから少し脅かしてやろうとしただけなのだ。

それが、いきなり逃げ出すだなんて。

「ヒッ！」

悲鳴だかしゃっくりだかをあげ、前を走る少女が振り向いた。

恐怖に染まったその顔は……間違いない。

「片瀬！ 片瀬姫足！」

それは同じ水泳部所属。平素から俺を恐れていた少女、片瀬姫足だった。

名前を呼んでも、もちろん足を止める事はない。

それどころか、叫んだ拍子に直りかけた口がまた少し破れた。

彼女が俺を脅した犯人？ なら何で今更逃げる。知ってたんだ

る俺の口の事を。

いや、そもそも姫足がそんな事するようなタマか？

何かがおかしい。ちぐはぐだ。そう思いながらも、辻褃の合

う説明は出てこない。

むしろ頭は混乱を増すばかりだ。

俺はひとまず考えるのをやめ、彼女を追うことに専念した。

頭の重さで出遅れた分がようやく帳消しになる。もう少しで追いつきそうになった所で、俺達は馴染み深い建物にたどり着いてい

た。

俺が毎日部活を行っているプール。その手前の更衣室の扉に片瀬は手をかけた。

彼女は素早くポケットから鍵を取り出すと、鍵穴に差し込む。

中に逃げ込む片瀬。それが女子更衣室だと気づき、俺は反射的に躊躇う。

その隙に彼女は扉を閉め、鍵をかけてしまった。

……まずい。普段のプールの入り口は、こと隣の男子更衣室。それにいるかちゃんも普段待機している事務室だけだ。

その三つの扉はここから見える。

しかし、今日だけはもう一つ穴がある。彼女もそれを目の前で見て知っている。

そう、あの壊れた金網だ。壊した？今はそんな違いどうだって良い。

ぐずぐずしていればあちらから逃げられる。

しかしそう読んで、俺が裏側に移動した途端こちら側から逃げるかもしれない。

「ちくしょっ」

迷っている暇は無い。俺は腰を屈めてドアノブに視線を合わせた。

口を思いっきり開けると、バリバリという不快な音が耳に響く。

躊躇うな。躊躇うな。

自分に言い聞かせながら、まるでネズミ捕りのように勢いよく顎を閉じる。

ガキン！それは歯がドアノブとかち合った音ではなく、歯と歯がぶつかった音だ。

目測を誤った訳ではない。

目の前のドアには、既にドアノブが無い。その部分にはぼつかりと穴が開いている。

金属をかじったと言つのに、俺の歯には何の歯ごたえもなかった

のだ。

俺は喉奥に転がってきた金属製の物体を飲み込んだ。

だからと言って、これが原因で腹を壊す事もないだろう。

……俺は歯も胃も常人とは違う。というよりこの口で飲み込んだものは胃には行かないようで、翌日トイレで発見されることもない。

向こう側で、プラスチック製のこの上にドアノブの欠片が落ちたらしい。それが何度か甲高い音を立てた。

俺は扉に手を当て、ゆっくりと押し開ける。

「いやあああー！」

瞬間。部屋の中で尻餅をついていた片瀬が悲鳴を上げ奥へ、プールへと逃げ出した。

……くそ、選択を間違ったか。思いながらも彼女を追いかける。彼女からすれば、鍵をかけようやく一息つけたと思ったら、恐ろしい音と共にドアノブが落ち、その向こうから恐ろしい歯やらギラついた目からが見えたといった所だろう。

どこの恐怖映画だ。

頭が元の大きさに戻ったことを確かめながら、シャワーを抜け、消毒槽を飛び越える。

「落ち着け！ 違う、違うんだ！」

何が違う。こんなどう見たって人間じゃない。

目をピカピカさせ、間接からキュインキュイン音を出している奴が「ロボチガウ」などと言っているようなものだ。

森で熊に会えば誰だって逃げる。落とし物ですよなんて聞き入れられるものか。

俺は、今の俺はそういう存在だ。いや、もっと禍々しい！

もちろん片瀬は足を止めない。

スタート台の横を、第一コース、第二コースと飛び越えていく。

彼女が向かう先は、やはり金網に隠されたあの穴だ。

そもそも追いついてどうする？ どう説明する？ こんなナリの

奴が言う事を信じてもらえないはずが無い。

それならいつそ口を封じ……。

やめろ、やめろやめろ違う俺は違う違う。

浮かんだ考えを無理やり消し、彼女の足を止める言葉を考える。

走っている、プール。

「プールで走ると危ないぞ！」

出てきたのは、くだらな過ぎる言葉だった。 言った瞬間頭を抱

えたくなる。

「え？」

その所為で、片瀬は可哀想に思える程間抜けな顔で振り向き、そして。。

コケた。

俺の言葉に言霊が宿った訳は無く、あまりのアホらしさに彼女の膝から力が抜け、頭の中が運動をつかさどる部分まで真っ白になったせいだろう。

どうあれ、彼女は生粋のドジっ子でもこうはできないだろうと言うほどに綺麗にコケ、頭から今日は人を徹底的に愛するらしい地面につっこんだ。

「だ、大丈夫か？」

そのサマに、俺は原因が自分である事も忘れ、小走りに駆け寄った。

「こ、来ないで！」

しかし、その足を竦ませるに相応しい声が、夜のプールに響いた。片瀬は怯えている。

目は見開かれ、小さな口から覗く歯は、かちかちと絶え間なく打ち合わさっている。

4と書かれたスタート台にすがりつき、必死に足を動かしているが、震えるそれは足の裏と大地の接触を許さない。

どうしようもない拒絶のポーズだ。 どの国だろうがこのボディランゲージが示す意味は変わらないだろう。

一瞬、頭に血が上りかけた。俺だって、好きでこんな口をしている訳じゃない。

しかし、その熱は上ったのと同じ速度で唐突に冷める。

……でも、そりゃそうだろう。それはそうだ。

俺はマフラーで、いまだ破れている口の端を隠した。

だからこそ俺だって、この口の事を隠して生きてきたんだ。

誰もこんなもん受け入れられるはずが無い。自分でも不気味だ、吐き気がする。

「……ごめん」

反射的に謝ってから、俺は言葉を続けた。顔を逸らし、声をしぼり出す。

「本当に、その、お前を食おうなんて、思った訳じゃないんだ。こんな口で、説得力が無いだろうけど」

片瀬のしゃくりあげるような呼吸が耳に響く。

「普段も、別に片瀬の事を驚かしたいわけじゃないんだ。ただ、ただ……」

俺がおかしな事をするのは、口が裂けそうになった時に突飛な行動を取っても不審に思われぬ為。それが第一だったが、もう一つ。

普通に振舞っていても、俺のいびつな部分を誰かに見破られそうで怖かった。

例え口が裂けなくても、俺の精神構造は普通の人間とは異なっているのではないか。

それが日常の受け答えに出て、それで俺の正体が発覚してしまうのではないか。

それが怖くて、俺はいつでもおどけていた。

しかし、怯えきった彼女に、そんな自分の内情を語るのも空しい気がした。

どれだけ悲惨な事情を言われようが、怖いものは怖い。

言葉を尽くしたって、それが化け物の口じゃ無駄だ。

「……お前の前にはもう現れないようにするから、この事は秘密にしてくれ」

結局言いかけた言葉をしまい、そう告げて俺は彼女から背を向けた。

多分、部活はやめる事になるだろう。更には学校も。

彼女が話したなら、家だって出て行かなければならない。

じゃなきゃ実験動物だ。

両親も、綾菜にだって迷惑がかかる。

アイツにだけは説明しようか。いや、同じ顔されたらその場で死にそうだ。

だからって、俺には彼女を食い殺す事なんて出来そうになかった。それをしてしまえば、俺が今主張している一切合財が嘘になる。

俺は真正正銘、化け物に成り下がるだろう。いや、もう充分化け物だけどさ。

「ま、待って！」

歩き出した背中に声がかかる。

俺は思わず足を止め、勢いよく振り向いていた。

びくりと片瀬が体を震わせた後、ぶるぶると首を振った。

なんだ、何でもないのか。ため息をつき、また首を戻す。

「ち、違うの！」

またも背後からそう叫ばれる。

もう一度、今度はゆっくりそちらを向く。

ぶるぶるぶるぶる。

首を前に戻す。今度こそ歩きだす。

「まって、違うの、止まって！」

さっきとは立場が逆だ。しかし彼女は俺の足を止める言葉を持っていた。

「私は、貴方なんて怖くない！」

もう一度、振り向かざるをえなかった。

「超震えてるじゃん」

そして、つつこまざるをえなかった。
彼女は相変わらず目の端に涙を浮かべ、体は見て分かるほど震えている。

「ぶ、震えてない！」

片瀬が自分の体を抱き、そう叫ぶ。

俺は口を開け、直りかけていた頬を破って見せる。

「ひっ」

片瀬が悲鳴を上げる。

そりやそうだ。 ああ、そりやそうだ。 諦めて、俺は立ち去ろうとした。

いい加減独楽のように回転すぎて目が回りそうだ。

しかし、その時、温かいものが俺の手を包んだ。

「……ッ！」

片瀬が、俺の手を握っていた。

もう振り返るまいと決めていたのに、首を回し、顔を彼女に向けてざるをえなくなる。

「怖く、ない」

片瀬は、相変わらず震えながら、俺を見上げ、笑って見せる。

その時の俺の衝撃が、理解できるだろうか。

彼女の目の前にいるのは、人間ではない。

彼女はそれが分かっている訳ではない。 体の震えがそれを証明している。

それでも、片瀬は俺の手を取った。

あるんだ、こんな事が。

言葉が出なかった。

そして、握られた手をどうして良いのかも分からなかった。

先程から片瀬が俺を引き止めたにも関わらず逃げようとしたのは、彼女に期待してしまうのが怖かったからだ。

化け物の俺が、もしかして受け入れられるのではないかと。

それが今、叶えられている。

夢じゃない。彼女の体温が、震える手がそれを証明している。本当に良いのか？ この人を信じてしまつて良いのか？ 俺は……。

「怖くないよ」

気づけば、俺の手のほうが震えていた。彼女に向き直ると、握つた俺の手にもう一方の手も重ね、笑顔を深くする。

もう、我慢できなかった。俺は彼女の手を振りほどく。

そして彼女の背中に両手を回し、思い切り抱きついた。

「え、あ、ちよ！？」

「こんな事しても？」

試すように、彼女に問いかける。

実際は、彼女に甘えたくて甘えたくて仕方なかった。

目の前にずつと待ち焦がれたものがあるのに、我慢などできない。

この口が耳まで裂けても、そんな事は言えないが。

「うん、大丈夫……」

体は相変わらず震えていたが、片瀬はそう答え、俺の背中に手を回してくれた。

そしてぽんぽんと、俺をあやすように背中を叩く。

自分の足も震えているくせに。まあ支えるのにちょうど良かっただろうと、俺は自分に都合よく考えた。

「もつと色んな事して良い？」

「それは……もうちよつと仲良くなつてからかな」

余裕が出てきて軽口を叩くと、彼女もそれに応えてくれる。

そうか、こういう子なんだな。抱きしめてからそれを知った。

軽く笑つて、名残惜しいが体を離す。考えてみたら、女の子抱

きしめるなんていうのも初めてだったな。

しかし、彼女の足を見た時に気づいた事があつたのだ。

「片瀬、膝から血い出てる」

「え？ あ、本当だ……」

転んだ時に擦りむいたのだろう。彼女は困り顔をしているから

拭くものなど持っていないようだ。

「まったく、ハンカチ持つてる大輔さんに感謝しな」

制服を漁ると、びっくりする事にハンカチが入っていた。しかもフリル付き。

そういえば綾菜に返してなかったな。今朝綾菜に血を吹かれたとき、強奪したままだったと今更気づく。

ここに来るまで動転していて、着替える気が起きなかったのも幸運だった。

「あの」

屈もうとした俺に、片瀬が呟く。

「ん？」

「姫足が良いな、呼び方」

そんなことを言いながら微笑むのだから、もう一回抱きしめられても文句は言えまい。

グツと堪えて、俺は頷いた。

「わかったよ、姫足」

「うん、大輔ちゃん」

「ちゃん!？」

「い、嫌かな？」

「嫌ってか……」

呼ばれた事ないぞ、そんな呼び方で。

しかしまあ、うん、なんか悪くない響きだ。新鮮でもあり、な

んか懐かしい。

「いいよ、大輔ちゃんで」

屈み、片瀬……姫足の膝にハンカチを押し当てながら返事をする。目を細めてしまったのは、その呼び名がくすぐったかったのと、彼女の足が夜闇にまぶしかった所為だ。

「うん、大輔ちゃん！」

多分姫足は、足よりももっとまぶしい笑顔で頷いた。

見上げられないのは、更にもっとまぶしいものが見えてしまう可

能性があるから。

今は、自分のこんな真つ赤なチエリーっぷりも微笑ましい。

「……でも、学校では言わないほうがいいかもな、それ」

三橋に睨まれそうだし。 鹿子にからかわれそうだし。 綾菜に

冷やかされそうだし。

「それじゃ、秘密だね」

「ああ、秘密だ。もちろんふおの口の事もな」

笑いながら、口の端を破かないように指を差し入れて見せる。

「うん！」

ああ、姫足はやっぱり眩しい笑顔で頷いていた。

見上げてしまっただけから、それに見惚れる。

ごめんなさい、僕は穢れない純情ボーイにはなれそうもないです。

姫足のスカートの中は穢れなき純白ガールでした。

そこで、そういえば、と思い出す。

結局彼女があメモを寄越したのか？ いや、彼女の態度からし

てそれは無さそうだ。

では。

ドボン。

と、彼女の足の間から見える景色。 そこを何かが通過した。

それは水音を立て、プールの反対側に落下する。

姫足もそれに気づき、振り向いた。

俺は立ち上がり、何が落ちたのか確かめる。

すると、月に照らされ、水中に何か影を落としているのが見え

る。

俺達の直線状にある四番コース。 そこに筆で線を引くように、

黒いモノが伸びていく。

「え？」

「大輔ちゃん！」

「え？」

混乱している俺を、姫足が突き飛ばした。

尻餅を痛がっている暇も無い。

スタート台の下から一気に飛び出した何者かが、姫足の頭上から彼女に覆いかぶさる。

そしてそのまま顎で着地し、ジェットコースターのレールのように体を滑らせ、俺の前でそれは鎌首をあげた。

後には、姫足の姿が無い。

「え？」

その見た目は、巨大な蛇だった。

体長五m。鱗は夜より黒く、月の反射を受け滑らかに輝いている。

腹は人の肌のような質感を持っており、作り物ではない証にゆるく上下していた。

横幅が広く、頭が大きい。その頭が上を向き、喉がゴクリと動いた。

ああ、口に入れたものを飲み込んだんだ。

口に入れたもの？

そこにいない、姫足に決まっている。

いや、今までのあの口の中に納まっていたのか？いくら大きいといっても、頭の大きさは一m程度。それに蛇が獲物を飲み込むには、長い時間をかけると聞いた事がある。

呆然とする俺を蛇が笑った。口の端を上げ、確かに笑った。

これは、蛇じゃない。

蛇の皮を被った、化け物だ。

まるで睨まれた蛙のように、体が動かない。

それでも、凍った体を何とか地面から引き剥がそうとする。

熱源は、握られた手の温もり。

それを頼りに、俺は腰を浮かし、相手を睨む。

この、化け物！

腰のバネを使い体を一気に起こすと、俺はそいつの頭をめがけ口を開いた。

蛇が驚いたかのように、まぶたが無いはずの目を見開く。
瞬間、頭の中に何かが過ぎた。

それが何かと考える前に、口が閉じていた。
大きく開けたはずの俺の口は、唇の端を破いただけに留まり、まるで蛇に接吻するかのような距離で留まっている。

蛇の目が細められたかと思った時には、奴は首を捻り、凄まじい速さでプールサイドを駆け抜けていた。

そして、急に曲がり金網の一角に体当たりする。

それはあっさりと倒れ 当たり前だ、立てかけてあるだけなのだ。
蛇はそこからしゅるりと屋外へ逃げ出した。

追い、かけなければ。

顔を突き出した間抜けな体勢を引っ込めるのに、かなりの力を要する。

俺が思考のまとまらないまま蛇を追おうとすると。

ビー！ ビー！ と、突然大きな音が夜の学校に響く。 びっくりと体が震えた。

ビ……。

が、布団に遮られた目覚まし時計の如く、それはすぐに鳴り止む。
なんだったんだ、なんなんだいったい。

走って追わなければ。 そう思うのに、体がのろのろとした歩みしかない。

意味が分からない、沢山の事が起こりすぎて。

正体がバレて、追いかけて、拒絶されて、受け入れられて、でも、その子が食われた。

俺は永遠に彼女を……いや、追いかけていけなければいけない。

俺は立ち上がった。

まだ消化されてないかもしれない。 あんなにあっさり飲み込まれたの？

今、腹を割けば助かるかも。 御伽噺じゃあるまいに。

とにかく追いついて……。 あの速さじゃ無理だ。

『本当は分かってる』

違う！

『あれは助からない』

「違う！！」

叫んで、違和感に気づく。今俺が叫び返したのは、何だ？

見回した俺の側には、倉庫しかない。姫足が気にしていた、開けずの扉だ。

そういえばあの時にも、声を聞いた。

「誰か、いるのか？」

問いかけるが、返事は。

『ええ』

あった。短く、はっきりと。

混乱する頭。その限界が今まさに訪れようとしていた。

双子と皮と冷蔵庫

『閉じ込められてるの』

その声は、確かにその倉庫の中から聞こえてきていた。

倉庫の中に？ そんな、この倉庫は開けずの間で、少なくとも俺が入部してからは誰も空けていなかったはずなのに。

『助けて』

戸惑っている俺の耳に、催促の声が響いた。

その声は落ち着いているような、忙しないような。

閉じ込められていると言うなら、後者は当然かもしれない。

「それなら、後で来てやる！ 今は鍵を探してる時間なんて……」

『鍵ならもう壊れかけてる』

「だから俺は」

『思いきり引つ張れば開くわ』

「人の話を」

『早くしなさい』『このゴブリ』

「だああ！」

その声の挑発に乗り、俺は開けずの扉に手をかけ、思い切り引つ張る。

一瞬引つかかる感触がしたが、声の言う通り、開けず扉はあっさり開いた。

扉を開き、まず目に飛び込んだのは真っ白な四角形だった。

開けずの扉の中は物が乱雑に積まれているが、一番上にあるそれは、色と俺の顔四つ分ぐらいの大きさのせいで、やたら目立つ。

なんだこれは。俺がそう思考し始めた刹那。

ズルツ。

正解を教えようとお節介を焼いたのか、その物体が滑り落ちて正体を明かし始めた。

そうか、物を詰め込みすぎて、開けると絶対崩壊するから開けず

の扉だったのか。

でも、だからって、だからこそ。

「何で冷蔵庫お!?」

その正体は、大型の冷蔵庫だった。横向きに、しかもわざわざ上に詰まれたそれが、ここを開けずの扉にした最大の要因に違いない。

ズルズルと、それは俺の身長以上の長大な全長を晒しながら落下してくる。

「うわああああ!!」

足が動くより先に、口が叫び声を上げていた。それは、俺の本能だった。

瞬間、俺の上顎がバリバリという音と共に、意思以上の速度で跳ね上げられた。

視線が月を捉えると同時に、下顎が何かの重みを検知する。

自重で降ろされた上顎もそれを捉えると、それは勢いそのままに歯の裏を滑っていく。

前歯、小臼歯、大臼歯、更に人間には存在しないはずの奥の奥歯を通り、唾液に塗れた舌をスロープのようにし、俺の口蓋垂のどちんこをこすりながら奥へと滑り込んでいったその正体を、俺はもちろん分かっていた。

喉の奥が陵辱されていく感触と、埃の味、その他諸々のせいで、目に涙が滲む。

ガチン！ 長大なそれが通過した途端、まるで特定の歯を押すと手が挟まれる玩具のように、俺の口が勢いよく閉じる。

唾液と共に、俺は喉奥に引っかかるそれを飲み干した。

途端に吐き気が襲い、後ろを向き自重で落ちるが如くプールに頭をつっこみ、水を口に含んで埃を吐き出した。顔を上げると、水鏡にこの世のものとは思えぬ不気味で、悪ふざけのようで、醜悪な化け物の姿が映る。

俺は、今何をした？ 元の大きさに戻った頭で考える。

『食べた』

『冷蔵庫を食べた』

背後から、またしても声が響いた。水鏡には何も映ってはいない。

『食べられるじゃない』

『口は飾りかと思っただわ』

『立派な化け物』

『丸呑みの化け物』

『『人食いの化け物!』』

『食っへねえ!!--』

思わず、俺は叫び返した。舌がでろんと飛び出したが、目の前にいる、自分が話している相手を初めて直視し、それをしまつのを忘れる。

『そうね、食べてない』

『食べる前に躊躇った』

俺の目の前には、双子の少女がいた。同じようにブルーのキャミソールを身につけ、同じように髪を右に流している。

いや、あまりにも高速で動いているから二人に見えるのかもしれない。二人が体が透けて見え、そこから後ろの景色が見えるのもその影響だ。

そう思いながら、それを確認した刹那、俺はダッシュで走り出していた。

『何で逃げるの?』

『お礼ぐらい言わせたら?』

『うるさい、うるさい!--』

逃げ出した訳じゃない。俺は姫足を探さなきゃいけないんだ。躊躇った? 何の話だ。相手の言葉に惑わされないよう叫びながら裏門を目指す。

多分逃げたのはこちらの方向だ。あの大きな音もこちらから鳴った。

『もう追いつけないわよ』

『それに消化されてるわ』

『まだ分からないだろ!』

叫びつばなしで口の端が治る暇も無い。走っているのに、声はまるで離れない。

裏門に到着。そこで。

「ギヤアツ!」

そこで俺は、思わず大声を上げた。

蛇が、あの大蛇が裏門の鉄扉に寄りかかっていたのだ。

『違うわ』

『よく見て』

双子に言われ、大きく開けかけていた口を閉じ、それをまじまじと見つめる。

よく見れば、それは所々鋭角に折れ曲がり、ストローの袋のように縮こまっていた。

目の部分に瞳は無く、レンズのような透明な膜だけが残っている。

『蛇の目はまぶたが無い代わり、そういう透明な薄皮で覆われているのよ』

『鼻の穴まで分かるわ。相当綺麗に剥けたわね』

『じゃあこれは、蛇の、皮?』

『そう、スキン』

『貴方の面の皮と同じ物よ』

「ぐっ」

双子の声が終わるより先に、蛇の皮が乗った取っ手に足をかけ、門の上に手をかける。

グシャリと嫌な感触を足元に感じるが無視。

『どつやって探すつもり?』

「どつやってって……! あんなでかい蛇がうるついでりゃあ」

相変わらず聞こえる声に律儀に答えながら、体を引き上げる。

『もつ皮は脱ぎ捨ててあるでしょう』

『そして人間の皮を着たはずよ』

着地。裏門から出ると、いくつかに分岐した細い路地と、それを区切る塀に囲まれた一戸建てが並んでいる。

その先がどう繋がっているか、俺はあまり把握していない。

校舎をぐるっと回って正門のほうへ逃げたのかもしれないが、あちら側は人通りも多い商店街だ。あんなでかい蛇が現れれば騒ぎにならないはずがない。

こちらから先だって、近くにデパートもあるし人通りが無い訳じゃない。でも、何だって？ 人間の皮を、被った？

考えて、頭に占める『もしかして』の可能性が、むくむくと、へび花火のように大きくなっていく。

「皮つてのは、もしかして」

恐る恐る、俺は背後を振り返った。

どうやったのか、体が透けたそっくりの双子は裏門に腰掛け、俺を見下ろしている。

「これの事か？」

破れた頬、そこへばりついているかのような自らの皮膚を引っ張って見せると、彼女達は満足げに頷いた。

『分かつてるじゃない』』

同時に言い、同時に首を縦に振る。

そうか、やはりそうだ。やはりアレは、俺と、俺と……。

『そう、アイツは皮を被り、人間のフリをして生きてる』』

『貴方と同じように』』

人ならざる化け物。それが俺に近い存在だと気づいていた。いつから……？

『だから、貴方も躊躇ったんでしょ』』

『相手が人間だ、って』』

「俺は……」

冷蔵庫を一瞬で飲み込める口。それが、頬を破く程度で留まったのは、あの瞬間、その可能性に気づいてしまったからだ。

蛇にびびったとか、腹の中にいたかもしれない姫足を考慮したとか、そんな事ではない。

『でも、それは勘違いよ』

『貴方もあいつも、人の皮を被った化け物だもの』

そんな事は言われずとも分かっている。分かっていたのに、俺は躊躇った。

そして、もう一つ分かったことがある。あいつが人間の姿で、駅や商店街に入り込めるなら……もう探しようが無い。

もう、追えない。ようやくそう悟り、俺は裏門に背を預け、座り込んだ。

『多分、口に入れられた時点で手遅れだったわよ』

『貴方だって、食べた冷蔵庫は吐き出せないでしよう?』

慰めているつもりなのか、幽霊……双子は俺の左右に別れて囁いた。

確かに、俺の胃には先程食べた冷蔵庫の感触などない。あの冷蔵庫はどこに消えたんだろうか。そして姫足は。

マフラーで口元を隠す。隠してから、俺はようやく頬の皮が繋がった事に気づいた。

汝は化け物なりや

「それで……お前らは、何なんだ」

学校から少し離れた市民公園。そこで俺は、ガムが裏にこびり付いたベンチに座り、双子に問いかけた。

頭は冷えているとは言いがたいが、先程よりマシな状態だ。

『化け物』

『貴方と同じね』

俺の左右に座った双子はそう答えながら、意地悪そうに目を細めた。

こいつらは、どうしても俺に自分が化け物だと認識させたいらしい。

「……化け物って言うより、幽霊に見えるんだが」

宙に浮くし、透けてるし。おまけにすれ違った人間にはまったく認識されなかった。

幽霊のテンプレで型作って、ポンポンと二個押し出したら出来ましたみたいな奴らだ。

しかもこいつら、先程から歩けど歩けど一定距離を保ってついてくる。

双子がその辺を見回しているようが、完全に後ろを向いているようが俺から離れる気配はない。

「しかも俺に取り憑いてる……」

『失礼ね』

『皮を借りてるだけよ』

皮つてのは俺の頬みたいに、露出すると困る化け物の本性を隠す為、化け物なら誰でも持っている擬態機能らしい。

で、それを故意か不意に剥いで、正体を現すのだ。逆に言うと、この皮を持っているのが化け物ってことだろう。

「借りてる？ ってことはお前ら自前のを持ってるんだよな」

『なくしたのよ。この体じゃ自力で動けない』

『だから貴方の皮に掴まってるって訳』

……訂正、持ってない奴もいる。何でそんなもの失くせるんだ。「じゃあお前らも、皮被つてりや普通の人間？」

『人間として暮らせる』

『貴方や、あの蛇みたいだね』

俺の問いに、双子は皮肉めいた笑みでそう答えた。

そうか。あの蛇も、やはり人間に混じって暮らしているのだ。

そして、多分。

「……この街で起きてる行方不明事件。あれもアイツの仕業なのか？」

問いかけると、双子は同時に肩を竦めた。

『多分ね』

『貴方が無意識に食べてる、とかじゃなければ』

双子のくだらない冗談を流し、俺は考える。

やはりあいつが人を殺して、その人達が行方不明扱いになっている。そう考えるのが自然だろう。

今日の、姫足のようじ。

我知らず、拳に力が籠っていた。立ち上がり、ポケットの小銭

でコーヒーを買う。

「お前らも飲む？」

『それ嫌味？』

『だからモテないのよ』

俺が尋ねると、音もなく着いてきていた双子は同じ形の皺を眉間に刻んだ。

それから自販機に腕を突き出してみせる。するとまるで出来の悪い3Dゲームのように自販機に手がめり込んだ。

「もっかい聞くけど、幽霊じゃないんだよね？」

ぎよっとなって再度問いかけつつ、ベンチに座りなおすと、俺は缶の蓋を開けた。

『しつこいわね』

『私達は死んだ覚えもないし、お経で成仏する気もないわ』

『幽霊は皆そう言うんだよ』

再び、同じように左右に座った双子に俺が言い返す。

軽口を叩くと楽になる自分に安堵と嫌悪を感じ、それを俺はコーヒの苦味で流した。

「お前ら……俺らみたいなのって、沢山いるのか？」

言いかけた時点で双子が顔をしかめたので訂正すると、彼女達は出来の悪い生徒を許す教師のような笑顔で頷く。

『どうかしら？』

『組織はここ十年で五十匹処分したって言ってたけど』

なんとなしにした質問で、いきなり未知の単語が出て唾然としてしまう。

頭を振って、俺はそれについて尋ねた。

「なんだ組織って。化け物を闇から闇に葬る凄腕エージェントが揃ってて、存在は絶対秘密みたいな奴か」

『あら、知ってるじゃない』

『概ねその通りよ。どこで知ったの？』

茶化すつもりで適当に並べたら、合つていやがったらしい。双子がまじめに頷くので、こちらがびっくりしてしまった。

「ゲームと漫画だよチクシヨウ。んなベタなもん作りやがって」

『人間の対処としては、それがベターなんですよ』

『未知なる生き物に遭遇した時のね』

だからってもうちょっと虚をついても良いだろう。話は早くてありがたいが。

誰だかに文句を言いつつ、俺はコーヒーを啜る。

「……つつか、それならその、組織って奴は今回の件で動いてないのか？」

俺らみたいな一般人でも……と、俺は人間じゃないんだよ、な。

まあ、ニユースでもやっている事を、その組織とやらが知らない

訳は無いだろつ。

『もちろん動いてるわ』

『私達の悩み所もそこ』

尋ねると、双子はコーヒを飲んだ訳でもないのに渋い顔をした。「なんで？ 黙ってても、そいつ等がああ蛇を何とかしてくれるんだろ」

その反応に、俺は首を傾げる。

こいつらにとってはどうでもいい事のはずだ。蛇と関係があるわけでも無し。

『組織には、人食いの化け物か人も食えない化け物かなんて大した違いじゃないの』

「嫌味かそれ」

『重要なのは、化け物かそうじゃないかだけ』

『見つかったら、どっちにしる処分よ』

「処分……ね」

件の蛇だけを殺し……処分して帰ってくるというわけではないようだ。

つまり、俺達は害虫みたいなもんということだろつ。

アブラムシ取る時に、良いアブラムシと悪いアブラムシが区別されないように、その人格経歴なんかは問われず、化け物ならば問答無用で駆除されてしまふと言う訳だ。

「迷惑な話だな」

『相手もこつちをそう思ってるわよ』

『異端なのはこつちなんだから』

人の皮を被った化け物。確かにそんなものが全人口より多いとも思えないし、イレギュラーなのは”こつち”なのだろう。

俺も確実に、蛇と同じカテゴリに属している。少なくとも、この世界にとっては。

「……でも、お前ならそう簡単に見つからないんじゃないのか？」
そんな考えを振り払って、俺は双子に尋ねた。

消えるし触れられないしで、こいつらならどんな奴でも見つけられないし捕まらないはずだ。

大体こいつらも普段は人間と変わらない姿をしている、という話だし……。

『貴方ならともかくね』

『でも、そうも行かない。何故ならあちらには占い師がいるから』
『思考を読んで皮肉を言われた気がする。』

が、こいつらのそれに付き合ってもしょうがないと理解し始めた俺は、後半に出た新しい単語に反応した。

「占い師？　なんだそりゃ」

俺の問いかけに、双子は満足そうに笑うとふわりと浮かび上がった。

ぎよっとする俺を尻目に、歌うように語る。

『曰く、どんな化け物も半年で見つける』

『曰く、人間と化け物を判別する』

『組織を組織たらしめている最高のエージェント』

『見つけた化け物数知れず』

俺の目線より少し上で、踊るように漂う。

そしてその言葉達には、聞き逃せない部分があった。

「ちよ、ちよっと待て。　占うって具体的にはどうするんだ？」

『本当に占うかは分かってないわ』

『あくまで伝聞』

『水晶玉を使うかもしれないし、相手の髪をちぎるのかもしれない』

『一匹だけ見つけるのかもしれないし、同時に複数見つけるのかもしれない』

特に後半に力を籠めて、左右から俺を見つめながら双子は告げた。

「……つまり、俺達も見つかる可能性があるって？」

『貴方だけ見つかってお仕舞いってこともあり得るわ』

『蛇はそれを期待してるんじゃない？』

足をぶらぶらと揺らしている双子に言われ、俺はハッとなった。

人を丸呑みにする化け物。 さっき考えた通り、人から見れば、俺だってあの化け物と一緒になのだ。

こんな口をしていて無害な化け物ですなんて、信用されるはずがない。

そう思っていたからこそ、俺だっけと口のことを隠し続けてきたのだ。

しかし、蛇は俺の秘密をどこかで知り、あのメモを俺に送りつけた。

片瀬もきつと何らかの手段で呼び出して、あわよくば俺に食べせようとしていたのだ。

だが俺が目論み通りに動かないと知ると、自らが彼女を食った。その罪を俺に被せる算段が、奴にはあるのかもしれない。

しかしそんな事、今はどうでも良い。 あいつがどういってもりだろうと、関係ない。

「そんな事の為に、片瀬……姫足は殺されたのか」
そいつのくだらない策略の駒にされて、姫足は死んだ。 それだけ、確かだ。

あんなに小さくて、怖がってばかりで、それでも勇気を絞って俺の手を握ってくれた少女を、殺した いや、もつと悪い。 消してしまった。

許せない。 だったらどうする。 止められるのか、俺に。 先程蛇を食い損ねた光景が、頭の中に蘇る。

しかし、俺がやらねばならないだろう。 俺が、アイツを……。

「何か思いつめた様子だけど」

「貴方には蛇を食べて欲しくないの」

「……なんで？」

双子の意外な言葉に、思わず睨むような表情で顔を上げてしまう。

「蛇を助けたいわけじゃないわ」

「もちろん貴方を心配してるわけでもない」

俺のガンつけにも双子は動じた様子はない。 超然と、俺を見下

ろしている。

「そりゃ、見れば分かる」

先程からの双子の言動は、どう見ても俺や蛇の心配をしているようには見えない。

今俺を見る冷えた視線もそれを語っていた。

こいつらに腹を立てても、いろんな意味で無駄だ。

ため息をつき、双子に話の続きを促す。

「貴方が内緒で蛇を丸呑みにしたとして、占い師にそれは伝わらないでしょ」

「調査がすぐに打ち切られる事はない」

いい子ねとでも言いたげに双子は相似形に笑ってから、話を続けた。

それも、そうだ。だが俺が「蛇は退治しました」なんて手紙を出す訳にもいかない。

匿名の手紙つてのがどんだけ神経逆撫でるか、今日身をもって知ったし。

「だったら……どうするんだよ」

「あいつが、占い師以外の組織の人間に見つかるのが一番ね」

「そんなのいるのか？」

「貴方が言ったんじゃない」

「化け物を闇から闇に葬る凄腕エージェント」

まだ不機嫌な俺の顔を、双子がからかうように覗き込む。

「見つけるのが占い師」

「実際に葬るのが、狩人」

組織というのは、あまり凝った名前をつける連中ではないらしい。

しかしシンプルな名前だけに、自分が人間扱いされていないことをひしひしと感ずる。

「原則、狩人と占い師は二人だけで事件に当たる」

「片方がいればもう片方も街に潜入しているはずだわ」

「二人って……少数精鋭にも程があるだろ」
ずいと寄ってきた双子の顔を押しつけよう……として手がすり抜ける。

決まりの悪い両手を、俺はコーヒを飲むことで誤魔化した。

先程から細かいようだが、律儀につっこみを入れていかない素面では聞けない話だ。

馬鹿馬鹿しい。何より自分がその馬鹿馬鹿しい話の一端を担う馬鹿馬鹿しい化け物なのが馬鹿馬鹿しい。

こんな口がでかいだけの化け物を狩る為に、あちらも組織を作った訳じゃないだろうが。

『それで成果が出てるんだから、文句を言う人もいないんでしょ』
『こつちからすれば不満タラタラだけど』

あの蛇みたいのを、二人……いや、狩人一人で倒しているとすればとんでもない話だ。

いや、化け物というのはあの蛇が飛びぬけているだけで、俺や双子みたいな大したことないのが大半なのかもしれない。

二人つてのだって、組織とやらが四畳半で暮らすような小さな物だからなのかもしれないし。

……しかしそうなると、蛇を探すにもどうにかするにも役立ちそうにないな。

見つかるのは嫌だが、かと言ってこれ以上被害が出るのも気分が良くない。

二律背反という奴だ。一応まだ、俺の視点は一般人寄りのつもりである。

『まあ、どうしても食べたいって言うなら、止めないわ』
『誰に見つからなくても、普通の人間のフリは出来なくなると思うけど』

微笑みながらどこか冷めた目で、双子は俺を見下ろした。

化け物とはいえ、それを食ったなら俺は多分、この人間としての視点を失うだろう。

蛇が何故人を食うかは知らないが、俺は奴の同類と呼ばれても反論できなくなる。

今のところ俺と奴を線引してる事柄は一つだけだ。
人を食ったか、食わないか。　しかもそれは、自分の中での線引きでしかない。

奴と同じレベルまで落ちてまで、蛇を殺したいか？

いや、普通の人間ならそんな事考えるまでも無く、目の前で大切な人が殺されたら復讐しようとする物なのではないのだろうか。

天秤にかけている時点で、既に俺の思考は人間と異なっているんじゃないのか？

だからといって、そんな人間らしさの為に奴を殺すなんて、それもおかしい。

『保留つてことで良いかしら』

『冷えてきたわ』

煩悶する俺の思考を、しかめ面の双子が遮った。　彼女達は同じように丸出しの肩を抱いている。

そりゃそんな格好なら冷えるだろ。　しかし今までそんな仕草まったくなかつたぞ。　そもそも温感機能がその体に備わってるか、非常に怪しいところだが……。

「まあ、一旦家に帰るか」

実は、綾菜にはデートだと言って出てきたのだ。　今夜は帰らないかもと言ったが、あの女まるで信じていなかった。

その抜群の信頼を裏切つてやつてもいいのだが、俺の体も冷えてきたしな。

「お前ら、他の人間には見えてないんだよな」

『そうね、皮を借りてる貴方以外には姿も見えないし声も聞こえないわ』

『その所為で苦労したわけだしね』

改めて確認すると、マフラーを緩めて足を自宅へと向ける。

『それと、気づいてる？』

『貴方の正体を知ってるって事は』

が、双子の言葉に緩めたマフラーを、また口元に引き上げる。拒否のサインが伝わったのか、そこで双子は言葉を切った。

俺の正体を知ってるって事は、俺も、蛇と知り合いの可能性がある。

それだけじゃない。蛇は、あのプールの金網を当たり前のように倒した。

アレが既に壊れている事を知っているのは、俺達、水泳部員だけだ。

「……まずは家に帰ってからだ」

半ば自分に言い聞かせるようにして、俺は自学へと向かった。

双子と双子

我が家に入るのに、何を緊張する必要などあるうか。

家についた俺は、俺は息を大きく吸い、それからなるべく静かにドアノブを回した。

「おかえり〜」

だというのに、やたら暢気な声がそれに反応し、声を出す。

声の感じからして居間にいるのだろうが、それにしても耳が良い。もしや蛇が綾菜を狙うのではないか。なんて考えもしたが、ひとまず無事のようにだ。

心配なんてしちやいないが、ほっと息を吐く。

『途中で急に青くなって』

『慌てて帰ったくせに』

「うるせえ」

茶々を入れる双子を睨む。 つうか今、そんなに分かりやすい反

応したか、俺？

「なに〜？ 何その反抗期真っ最中みたいな返事」

自分が言われたのだと思っただらしい。 居間から綾菜が不満げな声を出す。

やはり双子の声は聞こえていないようだ。 確認した俺は、靴を

脱ぎ居間を覗いた。

そこではパジャマ姿の綾菜が、股を開いた正座で足を折りたたみ、振り返っている。

声だけでなく見た目も充分バカっぽい。

「さてはフラれたんでしょ、大輔」

中身もバカ確定。 居間に入り、綾菜の両肩を押さえつけてやる。

「いたたたたた」

多分風呂後のストレッチでもしているのだろう。 悲鳴を上げな

がら綾菜は体を倒し、押されるに任せた。

『ふうん』

『そっくりね』

おそらく俺の頭の上からひよっこり顔を出したであろう双子が、
そう呟いた。お前らには言われたくない。

綾菜は痛気持ちいいといった様子で、目を細めている。しばらくして手を離すと、今度は足を伸ばし、体を前に倒しながらこちらを見た。

「へいへい」

意図を悟り、俺はため息をつきながら背中を押してやる。

その背中からは外から帰った俺とは対照的に火照っており、触れると汗が滲んだ。

柔軟してから風呂に入れば良いのと思うのだが、本人に言わせると、こちらの方が寝付きが良いんだそうだ。

「ん、ふっ」

綾菜はそんな俺の考えも知らず、床と体を接触させている。

例えば、俺がここで、今日あった出来事を話したらどうなるだろう。その柔らかい体を今まさに育みながら、俺はふと思いついた。

忠告ぐらいはするべきかもしれない。俺は蛇に目をつけられているのだから。

しかし何が言えるっていうんだろう。

姫足は明日学校に来ない。

水泳部には人食いの化け物が紛れ込んでいるかもしれない。

というかお前の弟がそうだ。

……言えはしない、何も。

「どうしたの、大輔？」

表情も見えないくせに、綾菜が俺に問いかける。こいつが敏感なのは、耳ではなく気配になのかもしれない。

「別に何でもねえよ」

一際大きく押すと、ごっつと音が鳴った。

「いったあ」

額を押さえて、綾菜が顔を上げる。

ニヤリとした顔で立ち上がる俺に、奴は文句を言おうと口を開いた。が、開いて、一度つぐんで、真面目な顔で別のことを言った。

「何か相談があれば乗るよ。割とマジで」

化け物がいるのだから、超能力者だっているのかもしれない。

占い師って奴もその一種のようだし。などと姉の顔を見ながら考える。

「相手がミーヤならなつて思っただけだよ」

もう一回笑つて見せた。が、すぐに目を逸らしたのは失敗だったかもしれない。

綾菜の顔を再度見ることが出来ないまま、俺はきびすを返して二階へと上がり、自分の部屋へ入った。

「はあ……」

俺が自分の部屋のドアを閉めると、双子がそこからゆつと顔を出した。

中々シユールな光景だ。少々呆れ顔なのは、さっきの俺の対応のせいだろうか。

とにかく色んな事があった。シャワーを浴びてすっきりしたい気もするが、それをするに蛇への怒りや姫足の手のぬくもりまで消える気がする。

というか、そもそも普通の人間なら、もっと取り乱したり、現実を受け入れられずに泣いたりするのではないだろうか。

だが俺は、こんな存在自体が冗談のような双子と、漫才まがいの会話までしている。

『何深刻な顔してるの?』

『似合わないわよ、それ』

「よく言われる」

まあ、仕方ない部分もあるよな。　こうやってずっと茶々入れられ続けていれば。

と、そこまで考えた所で俺は重大な事に気づいた。

「つつか、もしかしてお前からトイレまでついてくるつもりか？」

こんな小さな不安が先に立ってしまったのは、やはり俺が人間とは違う精神構造を有しているからなのだろうか。

尋ねると、双子は露骨に顔をしかめた。

『そんな趣味ないわ』

『貴方の性癖に付き合う気もない』

「趣味性癖の話じゃねえ」

双子はその顔のまま扉を抜け出、俺の前に立つとそつと頬を撫で

『えいつ』

たのは一瞬で、刹那、やたらと可愛い声で俺の頬を引つ張った。べりつと音がして、それぞれの手には肌色の、布切れみたいなものが摘ままれている。

慌てて頬を押さえると、口は閉じているはずなのに、ばつちり歯の感触とコンバンワ。

「い、いきなり何す……って今触れた？　ていうか今持つてる！？」
叫んでから、デビルイヤー綾菜が階下にいることを思い出して口を塞ぐ。　もちろん破れた横の方は塞ぎきれなかった。

『やっぱり破れやすいわね』

『よく今まで見つからなかったわね』

俺が口を塞いでいるのを良い事に、双子は勝手なことを言いながら、手に持ったそれをヒラヒラと振る。

やっぱり、持つてるよな……。

『持てなきや、自分の皮だつて被れないでしょ？』

『ついでに、これがさえあれば』

言いながら双子が、部屋を見回す。　そして奴らは俺のすぐ傍の

壁にかけてあつた人形に視線を向けた。

綾菜がゲーセンで取ってきたもので、そのまま俺に押し付けたものである。多分引き抜かれる前のマンドゴラをモチーフにしていると思われる不気味な人形であつた。

双子は空中で優雅にバタ足をしながらそこまで泳ぐと、手を入れて人形の頭と腕を動かす、いわゆるマペット人形を……掴んだ。

うん、掴んでいる。マペット人形のブサイクな顔が、双子の手によって更に不気味に変形させられている。

「……突き抜けないのか？」

『皮越しならね』

『この間、手は人間と変わらなくなってしまっけれど』

言われてみれば、俺の目の前にある双子の手の平だけが、先程までのように透けていない。

つまり今なら物も持てる代わりに、ダメージ判定もあるってことか。

「て言うかそれ、俺の、その、頬の皮だよな」

『そうね、貴方の化けの皮』 『組織はスキンと呼ぶだけけれど』

「英語にしたらだけじゃん」

つつこむが、双子は肩を竦めるのみ。私達に言われてもってところだろうか。

組織とやらがネーミングセンスに拘らないのは分かったが、いくらなんでも無頓着過ぎるだろ。

『普通の化け物は、スキンを脱ぎ捨てて活動する』

『でも私達は、皮を脱ぎ捨ててもそこから二mぐらいしか離れられない』

考えている間に、双子はマペットの中に手を突っ込み、それをベツドの上に投げた。

その双子の手が透明に戻っている。

『でも、皮から皮に飛び移る事は出来る』

『こんな風にね』

重力など関係ないだろうに、双子はぴょんと跳ねる仕草をすると、ベッドの上、更には言えば人形の上に正座で飛び乗った。

スカートを押さえるのが細かい。

「えーと、それなら離れても平気な訳か？」

『そ……ね』『トイ……もお風呂でも……ばいいわ』

答える双子の声は、まるで電波の悪いラジオのように妙に遠く聞こえる。

「何言ってるんだ？ よく聞こえない」

俺が言っていると双子は眉根を寄せる。

そして、まるでベッドが泥になったかのように、ずぶずぶとその中へ体をめり込ませていった。

「び、びびるから唐突にそんな事すんなよ」

言ってる間にも、今度は二対のマペットが同時にぴょこんと立ち上がる。

「貴方が聞こえ辛いつて」

「言うからでしょ」

そして、喋った。はっきりと、空気を震わせて。

「うぎゃあ！」

思わず叫ぶ。バリツと直りかけていた口の端がまた破れた。

マペットの手が、態々自らの耳を塞ぐ仕草をする。

「なななななで、喋って……」

「喉と口の部分に」

「スキンを当てたのよ」

「いや、それ人形だろ！？ 声帯なんて無えじゃん！」

やはり喋っている。俺の鼓膜を震わせている。

「細かいわね」

「私達はそういう生き物なのよ」

そんな無茶苦茶な。思いながらも俺はハッと気づき、俺は慌ててベッドに駆け寄った。

マペットを掴み、上下に振る。するとポトンと肌色の、俺のス

キンがその中から落ち、半透明の双子がその中からまるでランプの精のように現れた。

尻餅を憑いたようなポーズをしているのは、抗議の一環か。

「部屋の中から幼女の声なんかしたら、綾菜に通報されるだろうが」顔を寄せ声を潜めた俺が言うと、双子は俺にダブルで頭突き……のような仕草をして頭を突き抜けさせた。

『貴方の方が余程うるさいわよ』

『貴方に乗り換え直したわ。これで良いでしょ』

文句を言う声がクリアに聞こえる。なるほど、俺に乗り移り直したのか。

「無茶苦茶だな、お前ら」

『冷蔵庫を食べる』

『貴方に言われたくないわ』

俺が自分の頬の皮を、迷った拳句ゴミ箱に捨てながら言うと、双子は俺の頭から自分達の頭を引っこ抜き、ひどく心外そうな声を出した。

そもそも食わせたのは誰だよ。

と、こいつら閉じ込められてたって言っただっけ？

「……そうだ、何であんなところにいたんだ？」

思い出し、聞いてみる。

すると双子はベッドから舞い上がり、白い下着を晒しながら交互に語りだした。

『二ヶ月ぐらい前かしら』

『ある日、蛇の皮を見つけたの』

「皮って……あいつが被ってる人間のか？」

『違うわ。細長い蛇の皮よ』

『貴方も見たでしょう？』

「ああ、あつちか」

興奮はしないが妙に落ち着かないので、俺はベッドに座ってそれを見ないようにする。

双子の説明が正しいなら、蛇は俺と同じく、普段は人間の姿をしているはずだ。

『蛇は二種類の皮を着ている』

『と推測されるわ』

『脱皮できる大蛇の皮』

『そして人に紛れる為の人間の皮』

ややこしい。そんな所のお洒落に気を遣わなくても良からうに。なんて思っている俺の左右に双子が舞い降りてき、同じようにベツドに腰掛けた。

「そういえばあのでかい皮。学校に置いてきちまったけど、明日騒ぎにならないか？」

『大丈夫よ。スキンは化け物にしか見えないもの』

『化け物でも、注意して見ないと気づかなかつたりするけれど』

今更気づいて俺が尋ねると、双子は同じように指を立て、そう答えた。便利にできているものだ。

それから彼女らは同時に話を戻すわよと言い、先程の続きを話し始める。

『私達が、自分達のスキンを脱いで、蛇の皮で遊んでいる時』

『事件は起きたの』

蛇の皮で、遊ぶ？

双子は手を上げ、がーとジエスチャーしている。被って獅子舞遊びでもしてたんだらうか。

『……風が吹いたの』

「風？」

『ええ、それで私達の皮は飛んだわ』

「ちょっと待て、お前らの皮つてのはダッチ……空気人形みたいな奴なのか？」

『下種な配慮をありがとう』

『風船みたいな物だと考えてもらえばいいわ』

嫌そうな顔で双子は俺に礼を述べた。なるほど、ソーセイジみ

たいなものか。双子だけに。

その中身が抜けると、多分ペラペラのローラーで潰された奴みたいなものになって、それが空を飛ぶ。

「ギャグ漫画じゃねえか」

「重大事よ。私達の皮は」

「貴方みたいに簡単には再生したりしないんだから」

んなこと言われても、こうなっているのだから仕方ない。唇まで指でなぞり、俺は自分の皮が、双子の言うとおりに再生した事を確かめる。

「そのうち、蛇の皮も小さくなったわ」

「脱いだ後は縮んでいくんでしょようね」

裏門に引つかかっていたものも、きつと明日にはソフトボールぐらいの大きさに縮んでいるはずと、双子は言った。

女性用下着のような奴だ。

「で、乗り変えた蛇の皮も風に飛ばされて、あの倉庫に引つかかっ
たって訳」

「流石にこの二ヶ月、退屈だったわ」

乗り換えたっていうか、乗り移っただろう。口には出さず俺は
つつこむ。

「……そうか、お前らって皮から皮へ渡り歩けるんだよな」

そこでふと、俺は妙案を思いついた。双子に尋ねると、彼女ら
は同時に頷く。

「だったら、俺がお前らを連れ歩いて、水泳部員に引き合わせれば
良いんじゃないか？」

で、乗り移ろうとしてみれば良いのだ。できればそいつが犯人
できなければ、少なくとも我が部員の潔白は証明できる。

うん、我ながらいいアイデアだ。

「それは不可能」

「出来ないわね」

だが、双子は俺の提案をあっさり却下する。

「なんで」

『正しい入り口が分からないと』 『化け物の体には入り込めないの』
「お前ら壁とか通り抜けられるじゃん」

『化け物の体の境目というのは、超合金の壁よりも分厚いものなの』
『もしくは貴方の人生観より薄っぺらい物』

「うるせえ。 どうせ人の生なんて謳歌してないわ」

俺が言い返すと、双子は何故か満足そうに頷いてから、更に言葉を続けた。

『私達が皮に入り込めるのは、相手が皮を剥いだり着たりする瞬間』
『もしくは相手が精神的に弱っている時ね』

そういう時は穴が広がるの、と双子はのたまう。

「あー、弱ってる人間には悪霊が入りやすいつて聞いたことあるな」
なるほど。 そういう所もそっくりな訳だ。 俺が納得して頷く

と。

『……………』

双子は正座したまま俺を睨んだ。

『本当に憑り殺すわよ？』

『貴方の安眠を妨害するなんて簡単なんだから』

「やめてくれ。 全身に文字書く元気なんて今日は無い」

とにかく、それなら怪しい人間に手当たり次第取り憑……………いや、
入り込んで見るって作戦は使えない訳だ。

……………怪しい人間。 候補は一応、水泳部の人間って事になるんだ
ろっつ。

あの中に、殺人鬼……………もとい殺人蛇が居るとは思いたくない。

それも、俺が食う必要があるかもしれないなんて。

何とか話し合いで解決できないだろうか。 なんて、姫足が食わ
れた事も忘れて弱気な考えが浮かぶ。

そんな自分を嘲笑いつつ、俺は呟いた。

「話なんて通じないか。 蛇だけに」

『何それ』

『いきなり何?』

「蛇つて耳が無いだろ。だから聞こえないって……」

双子が怪訝そうな顔をするので説明してやる。すると彼女らは余計首を捻った。

『でも蛇つて音は聞けるらしいわよ』

『骨伝導みたいな仕組みで』

「へえ……」

ギャグが滑つて罵られるところまでは想定していたが、まさか根本が間違っているとは予想していなかった。

……別に俺が罵られて喜ぶ変態つて事じゃない。ただ、姫足を殺した奴と和解しようなんて考える軟弱さを誰かに否定してもらいたかっただけで……。

途中で姫足の笑顔が思い浮かび、慌ててそれを打ち消す。彼女の最期。それと共に、俺には一つ思い出した事柄があった。

「しまった、ハンカチ落としたまんまだ」

『『ハンカチ?』』

「こう、ピンクのふりふりで真ん中にアニマル系のプリントついでる奴」

『何それ』

『気持ち悪い』

「お前らもうちよっと言葉選べよ!」

つつか俺の趣味でも所有物でもない。全面的に双子の姉が悪い。

しかし今から戻るといいうのもなあ。部活の後に落としたとでも

言えば問題ないか。

……人が死んだというのに、俺はまた自分の身の安全ばかり考えている。

ふとそれ気づくと、暗澹たる気持ちになってきた。

もうどうにでもなってしまうという捨て鉢な思いも湧いてくる。

『何だか、今日はお疲れみたいね』

『細かい話は明日にしましょうか』

俺の表情をどう思ったのか。双子がそう提案してくる。

「悪いけどそうさせてもらおうわ」

その提案に乗って、俺はマフラーを解いてベッドに倒れこんだ。

顔が枕に接触すると、一気に眠気が膨れ上がっていく。最後の力で体をずらし、布団を口元まで引き上げると、俺はあっさり眠りに落ちた。

両側にイカ腹のある生活

朝、目を覚まして左を見ると、腹があった。

右を見ても腹がある。何事かと頭の上を見ると、すやすやと眠る二つの顔。

双子が俺の頭を挟んで、お互いに向かい合って眠っていた。

ああ、昨日の出来事が夢じゃないってことぐらい分かっている。アレが夢だつてなら、この口自体が十年以上続く悪夢だ。

ていうかこいつら、睡眠必要なのか？ それと、俺は起きても良いのだろうか。俺が動くと、こいつらはこの寝そべった体勢のまま引きずられていくのだろうか。

こんなこまっしやくれた奴らの寝起きがどうだろうと知った事ではないとは思うのだが、寝ていれば可愛いって表現も出来なくはないんだよな。

間違いなく間違いなんだけど、両耳が温かい。

まるで双子に体温があるみたいだ。もう少し耳を寄せれば鼓動が聞こえるだろうか。

あ、やべ。また眠くなってきた。

『可愛い寝顔だったわよ』

『一生寝てれば良かったのに』

予鈴と共に正門へと滑り込んだ俺を、双子が囁す。

二度寝で危うく遅刻する所だった。

荒い息を整え口の端を確認した俺は、教室の中へと入った。

「よお大輔」

「つつす柸。アレ上手く行ったか？」

「おはよう大輔」

「やあ南。風邪治った？」

「何だ、今日は遅いな大輔」

「遅刻常習犯に言われたくないなあ」

「……はよ」

「やあ、今日も可愛いね」

「キヤー、大輔クーン」

「うるせえ双子の姉」

側を通った奴らと一言二言交わして席に着く。

俺を置いてさっさと登校した綾菜を責める事はしない。 部屋に入るのを禁止しているのは俺だからだ。

寝ている間に大口でも開けてたら、隠しようが無いからな。

夏場でも口元まで布団を被せるのは、小さい頃からの癖だ。

『本当によく喋るのね』

『普通黙らない？ そんな口してたら』

席に着くと、双子が耳元で囁きかけてきた。

「笑つといたほうが良いんだよ。普段から必死で口閉じてると、面の皮が硬くなる」

俺は小声で言い返す。 少なくとも、俺自身はそう思っていた。

顔の筋肉は強張るものだから、マッサージしましよなんてのはよく言われることだ。

大体鉄面皮なんて噂が立ったら、それを崩してやろうと考える人間だっているだろう。

不意打ちで笑わせに来られたら、我慢できる自信はない。

世の中は面白いのだ、憎らしいほどに。

「俺なりの処世術って奴だ」

『あら意外』

『昨日の考え無しは別人かしら』

こいつらはストレートに憎たらしい。

昨日のは、そう、普段真面目にしていると、たまにはっっちゃけなくなるっていうか……。

「つつか、遊んでて自分の大事なモノ飛ばされたお前らに言われた

くねえ」

言ったところで担任の岡崎ちゃん（二十五歳女教師）が入って来、俺は口を閉じる。

『へえ、それを言う』

『言ってくれるのね』

………おかげでHR中、双子は言い返せない俺をひたすらなじり続けた。

こいつらとの会話を打ち切るタイミングには注意しよう。俺はそう心に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8707z/>

ミミック・コミュニケーション

2011年12月28日23時48分発行